
魔法少女リリカルなのは 異世界に行ったエクソシスト

シーザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 異世界に行ったエクソシスト

【Nコード】

N9477U

【作者名】

シーザス

【あらすじ】

ある日、少年は見知らぬ場所に居た。

主人公D・Gray-manのアレン・ウォーカーです。

主人公、オリジナルイノセンス持っています。

色々オリジナル要素入っています。

主人公レアスキル希少技能？創造する力？を持っています。

オリジナルキャラ出ます。

AKUMA、オリジナルAKUMA、イノセンス、オリジナルイ

ノセンス、技、オリジナル技出ます。

この小説では、アリシアとプレシアとリニスの三人が生きています。

原作から多少、もしくは少々ズレています。

プロローグ

プロローグ

此処が何処かはわからない。

二つだけわかつているのは、此処は僕が今まで居た場所じゃないということだ。

そして、僕はすでに死んでいる。と、いうことだけだ。

此処は何処なのだろう。

辺り一面真っ白で、一つの『扉』が在る。

ただ、それだけだ。

そして、部屋に翼を持った女性が入ってきた。

* 「あれ…？ 貴方は？」

* 「僕…ですか？ アレン・ウォーカーと言います。『エクソシスト悪魔払師』
です。『神の結晶イノセンス』は、『クラウン・クラウン左手』の？神ノ道化？です。でも、
何故か『左手』のイノセンスが無くなって、今は『右手首』の？腕
輪？がイノセンスです。」

* 「えつと…アレン・ウォーカーさん…」
アレン「はい。そうですか…」

僕が返事をする、女性は、土下座をしながら僕に謝ってきた。

* 「すみませんでした！！アレン・ウォーカーさん！！」

アレン「わわっ！？一体どうしたんですか！？話がわかりません！
！」

* 「はい。そうでしたよね… 実は…」

そして数十分後

アレン「…じゃあ、僕が死んでしまったのは、貴方の部下の手違いによるもの…と、いう事ですか？」

*「はい… 本当におすすめでした…」

アレン「謝らなくても良いですよ。？女神？」

女神「ありがとうございます… アレン君で良いですか？」

アレン「あ、別に何でも良いですよ。僕も？女神？と呼びますから。」

女神「はい。わかりました。アレン君。貴方のその？腕輪？は、貴方の創造で、他の『イノセンス』を扱う事が出来ます。ただし、その？腕輪？で創造出来るのは『イノセンス』だけです。それから、全て『イノセンス』で全ての技が使えます。（例えば、？神ノ道化^{クラウン・クラウン}？で？六幻？の技が使える感じ。）後、希少技能と呼ばれている力があるのですが、貴方には、？創造の力？を授けます。最後に、貴方は全ての？ノアズメモリー？を使える様にしておきます。それと、貴方には？方舟？をいつでも使える様にしておきます。ちなみに…貴方がこれから行く世界にも、AKUMAが出てきます。ですから、十分に注意してください。それから、貴方が今から行く世界では、貴方は八神はやえと言つ少女の家に居ます。その少女と貴方は一緒に住んでいます。その家には、シグナムと呼ばれている女性、シャルと呼ばれている女性、ヴィータと呼ばれている少女、ザフィーラと呼ばれている狼^{男性}が居ます。最後に、貴方には子供になつてもらいます。それでも…良いですか？」

アレン「一気に色々言われて、少し混乱してますが…別に構いませんよ。」

僕が答えた瞬間、僕の身体が光に包まれて、子供（約9歳頃）の姿になつていた。

女神「それでは… この？扉？をお通りください。」

そう言うと女神は、？白い扉？を出現させる。

女神「それでは…行ってらっしゃい。アレン君。」

そして僕は答える。

此処には、もう、二度と来れないかもしれない。

アレン「行ってきます。？女神？。」

そう言うと、僕は？扉？を潜った。

プロローグ（後書き）

シーザス「感想などまっています。後、自分が書いてるもう一つの小説『破滅に導く者』もよろしくお願いします。」

一話

一話

アレン「行きますよ！！シグナム！！」

シグナム「来い！！ウォーカー！！」

アレン、シグナム「はあああ！！」

僕は今、シグナムと模擬戦をしていた。

模擬戦は、外では危ないので、？方舟？の内部でやっています。

アレン「クロス・グレイヴ十字架ノ墓！！」

僕は、十字架ノ墓をシグナムに向けて放つ。

シグナム「何！？ くっ…！！」

シグナムは、少し驚いていましたが、寸前かわされました。

アレン「くろう…惜しかったですね…」

シグナム「まったく…何でも有りだなウォーカー。しかし、私も負ける訳にはいかない!!」

アレン「僕も負ける訳にはいきません!!イノセンス発動!!?六幻?!」

僕は、神田のイノセンスの?六幻?を発動します。

因みに、?六幻?等の『装備型』のイノセンスは、僕の?腕輪?に鎖で繋がっています。

因みに、この鎖は、僕以外（AKUMAやノア、一般市民のみ。仲間や友達、適合者は例外。）には触れない。

因みに、この鎖は動きの邪魔には一切なりません。

シグナム「!! 剣か…レヴァンティン!!エクスプロージョン!!」

レヴァンティン《エクスプロージョン!!》

シグナムの剣…レヴァンティンから、弾薬が排出されると、レヴァンティンが炎を纏う。

シグナムは、これで終わらせる腹ですね。

なら、僕だって…

シグナム「柴電一閃!!」

アレン「?五幻 爆閃爪?!」

僕は神田の?五幻式?、?爆伯斬?と?裂閃爪?の、?爆伯斬?の斬撃を?裂閃爪?の斬撃に合わせたみたいな感じの斬撃を放つ。

しかし、その時…

*「アレン君！シグナム！ご飯出来たで」
アレン、シグナム「はやて！？（主！？）」

ドカーン！！

僕たちの技がぶつかり合って爆発をする。

はやて「わわっ！！」

はやてが車イスごと転びそうになります。

アレン「はやて！！」

僕ははやてを抱き抱えます。

アレン「大丈夫ですか？はやて。」

はやて「う…うん…大丈夫だよ…／＼／＼」

はやてが顔を赤くしています。

僕…何かしましたっけ？

アレン「すいませんはやて。言ってくれば手伝ったんですが…」
はやて「別にいいんよ。さ、行くっか。」

アレン、シグナム「はい。」

僕たちは、？方舟？から出ました。

？方舟？を出た僕たちを出迎えたのは、赤髪の少女と、金髪の女性、青い狼だった。

*「あ！おーい！はやて！アレン！シグナム！」
はやて「あ。ヴィータ。」

アレン「ヴィータ。出迎え、ご苦労様です。」

シグナム「ヴィータ。出迎えご苦労だな。」

ヴィータ「おう！！ アレンとシグナムは、また模擬戦やってたのか？」

アレン、シグナム「はい。（ああ。）」「」

ヴィータの問いに僕たちが答えると、ヴィータ、はやて、シャマルの三人が苦笑いしていた。

シャマル「そう言えば…アレン君。後で…《またAKUMAが…》」
アレン「《なるほど…》わかりました。」

アレン「しかし、たくさんいますね。」

シグナム「そのようだな。ウォーカー、何か案は無いか？」

アレン「そうですね…じゃあ、僕がやります。皆は、少し離れててください。」

ヴィータ、シグナム、シヤマル、ザフィーラ「了解。《了解した。》」

シグナムたちが、僕から離れた事を確認する。

さて、始めましょうか。

アレン「さて、どうしましょうか？（ここは？炎羽？を使って…いや、？炎羽？じゃ駄目だ…だったら…）…？六幻？発動…『二幻式？二幻刀？。』」

僕の両手に六幻が握られる。

アレン「…僕の魔力を吸い高まれ？六幻？。…？禁忌 三幻式？」
これより刀は魔力を代価に主に力を与えよう。」

僕は、？禁忌 三幻式？を発動する。

シヤマルから聞いた話ですが、僕は魔力値がEランク（測定不能）らしく、魔法を使っても全然疲れない。

だから、？禁忌 三幻式？の代価を魔力に変更したんです。

アレン「いきますよ。？六幻？。？二幻 八花螳螂？！！」

僕は八つの斬撃をAKUMAたちに向かって放つ。

レベル1「ぎゃあああああああ！！」

レベル2「なんだ！？ うわあああああああ！！」

レベル3「ぐおおおおおおお！？」

AKUMAたちは、数が半分消えました。

レベル3「エクソシストか！！レベル1！！」

レベル1「おおおおおおおー！！！！！！」

レベル1は、僕に向かって『砲撃（血の弾丸）』を無数に放ちます。

アレン「（とりあえず…シグナムたちが来るまで、防いでみましょうか…それが良いですね。）とりあえず…？盾？…【現れる】！！！」

僕の目の前にいくつもの？盾？が現れる。

？盾？は、？血の弾丸？を全て防ぐ。

アレン「ん？これは…《シグナムですか？》」

シグナム「《むっ…やっとな繋がった。ウォーカー、すまない。今しばらく、そこで待っていてくれ。》」

アレン「《どうしたんですか？シグナム。》」

シグナム「《実は、こっちにも数体AKUMAが居てな。少し手こずっていた所だ。》」

アレン「《なるほど。わかりました。大丈夫です。こちらは、？盾？で全部防いでますから。》」

シグナム「《すまない。ウォーカー…》」

アレン「《いえ、大丈夫ですよ。》」

僕はシグナムと？念話？を切った。

シグナム「シャマル！！お前は、ここに残れ！！私とヴィータ、ザフィーラの三人でウォーカーに、合流する。いくぞ！！ヴィータ、ザフィーラ！！」

ヴィータ、ザフィーラ「おう！！《承知した。》」

私はヴィータ、ザフィーラを連れて、ウォーカーがいる場所へと向かう。

シグナム「はあああ！！柴電一閃！！」

ヴィータ「おりゃあああ！！シュワルベフリーゲン！！」

ザフィーラ（人型）「守護の拳！！」

シグナムの剣が、ヴィータの鉄球が、ザフィーラの拳が残りのレベル1〜3を全て破壊する。

アレン「これで終わりですね。」

そう言っただけで今日が終わった。

長い1日だった。

一話

一話

アレン「すう……すう……」
はやて「ふわあ……おはよう……って……あれ？ まだ、誰も起きてないんか？ あの早起きのシグナムとアレン君まで寝とるなあ……
そっか。昨日、遅かったんやな。」

私は、隣で寝ていたアレン君に毛布をかけて、私は車イスに乗って部屋をでます。

因みに、私はアレン君と、一緒に寝ています。

はやて「あれ？ シヤマルやザフィーラ、ヴィータまで起きてないなんてな。昨日、そんなに遅かったんかなあ……まあ、朝御飯でも作ってようかな。」

私はそう言って、朝御飯の準備を始めます。

アレン「……うん…？ あれ？ はやて…？」

僕ははやてを探しますが、はやては、部屋にはいませんでした。

アレン「あれ？ はやては…もう起きてるんでしょうか？」

僕はそう言つて身体を起こした。

僕は廊下に向かうと、シャルが急いでいた。

アレン「おはようございます。シャル。」

僕は急いでいるシャルに声をかける。

シャル「あ、おはようございます。アレン君。すみません…！実は今、急いでいますので、すみません…！また後で…！」

シャルは、急いで階段を降りていった。

アレン「…か…かなり急いでましたね…シャマル… ヴィータを起
こしにいきましょうかね。」

僕はヴィータの部屋に向かいます。

アレン「失礼します。ヴィータ？」

僕はヴィータの部屋に着くと、ヴィータを起こします。

アレン「ヴィータ。起きてください。」

ヴィータ「ううん……………ふわぁ？ アレン…？ おはよう…」

アレン「おはようございます。さあ、はやくてたちが待っていますよ。」

ヴィータ「…うん…い…」

アレン「あはは… まだ、かなり眠そうですね… ヴィータ。いき
ましよう。」

ヴィータ「…おお…」

アレン「…あ…あはは…」

僕は苦笑いを浮かべながら、部屋を後にする。

シヤマル「はやてちゃん！！すみません！！寝坊しました！！すぐに手伝います！！」

はやて「そんなに急がなくても良いよ。」

シグナム「…う… おはようございます。主。」

はやて「おはようさん。シグナム。ザフィーラもな。」

ザフィーラ《おはようございます。》

皆が起きて、一階のリビングに集まっていました。

アレン「おはようございます。はやて、シグナム、シヤマル、ザフィーラ。」

ヴィータ「…おはよう…はやてえ…」

はやて「おはようさん。…ヴィータ凄い眠そうやな… お風呂入っといで。」

ヴィータ「…うん…」

はやてに言われて、ヴィータは、お風呂に入りに行きました。

アレン「シグナム。後で…《今日は、特訓。よろしくお願いします。》

シグナム「ああ。わかった。《よかろう。私で良ければ、付き合っぞ。》

アレン「ありがとうございます！！」

そう言って僕は頭を下げる。

それから数時間後…

アレン「始めから飛ばしていきますよ。？五幻式?!！」

僕は始めから？五幻式？を使います。

因みに、？六幻？は使ってません。？神ノ道化？です。？退魔ノ剣？を使っています。

シグナム「!! ならばこちらもいくぞ!! レヴァンティン!!」
レヴァンティン《エクスペロージョン!!》

シグナムの剣…レヴァンティンは、炎を纏う。

アレン「そう言えば… シグナムのソレ… どうやってるんですか？」

シグナム「コレ（炎）か？ 私の場合だが… 私は『炎を纏わせる』イメージだな。」

アレン「なるほど…」

少しすると…

アレン「あ、出来ました。」

アレンの？退魔ノ剣？が、純白の？炎？を纏っていた。

シグナム「凄い才能だな… しかし、これでまた、ウォーカーとの模擬戦が辛くなるな…」

アレンは、あっさりと使いこなしていた。

アレン「いきますよ… シグナム！！ ?破壊ノ咆哮?!!」
デス・ボール

僕はシグナムに向けて、?破壊ノ咆哮?を放ちます。

シグナム「!! デカイ!! うわあ!？」

シグナムは、危ない所かわすも、少しかすってしまふ。

シグナム「… なんと… だが… フフフ… 燃えてきたぞ… い
くぞ!! ウォーカー!! 貴様の力を見せてもらおう!!」
アレン「はい!! いきますよ!! シグナム!!」
シグナム「こい!!」

こうして、僕とシグナムはぶつかり合います。

アレン、シグナム「はあああ!!」

シグナムと僕は何度も切り合う。

アレン「?炎ノ剣?!」

シグナム「飛竜一閃!!」

僕の?炎ノ剣?と、シグナムの飛竜一閃がぶつかり合います。

バキーン!!

相殺する。

アレン「これで終わりました。」

シグナム「ああ。今日は、これが最後だ。」

僕たちは、同時に構える。

アレン「『属性変換』属性、『雷』!!
?雷ジャムブウル龍?!!」

僕は?雷の龍?を放ちます。

因みに、?雷龍?を放つ時、今回は?神ノ道化?の?退魔ノ剣?だからですが、?退魔ノ剣?を(主に地面に、足場がなければ空中等)突き刺します。

シグナム「飛竜一閃!!」

シグナムは、飛竜一閃を放ちます。
僕たちの技がぶつかり合って爆発をします。

ドガアン！！

そして、ほぼ同時に僕は？退魔ノ剣？を、シグナムはレヴァンティンをお互いの喉元に突きつける。

アレン「…引き分け…ですかね？」

シグナム「…そのようだな。」

こうして、僕とシグナムの模擬戦は、終了しました。
そして僕たちは、方舟から出ます。

アレン「終わりましたよ。　《シグナム。　そっちはどうですか？

…シグナム？》

シグナム「《ウォーカー！！　すまんが、今すぐ援護に来てくれ！！》

アレン「《！？　わかりました！！　すぐにいきます！！　それま

で… 耐えてください!!」
シグナム「…すまない!!」

僕は急いでシグナムたちの元へ？方舟？で飛んだ。

三話

三話

シグナム「ハア… ハア… くっ… しまった… 完全に… 油断
していた… (しかし… ウォーカーがくるまで… しのぎきる！
！)」

私は荒々しく息を吐いていた。

だが、まだこんなところで倒れる訳にはいかない！！

主を幸せにするまで！！

そして…

ウォーカーとの約束を守るために！！

私はそう心に決めていたが、正直もう、限界だった。

しかし、次の瞬間

ズバン！！

私の目の前に迫っていたレベル3が数体、切り裂かれる。

シグナム「…………… 持ちこたえたぞ… 後は… 頼んだぞ… ウォーカー…」

私は？少年？に向かってそう言った。
少年は、答える。

アレン「…………… 任せてくださいよ。シグナムは、のんびりして
いてくださいよ。コイツらは、任せてください。」

少年は、笑って答える。

シグナム「…………… 任せたぞ… ウォー… カー…」

私はそう言った後、気を失った。

アレン「ご苦労様でした。シグナム。…………… 僕の？大切な人
？をよくも… 許さないぞお前達」

そう言って僕はレベル3に向かって行く。

アレン「じゃあ… 『新しい技』を試みましょうか。　　？神ノ道
化？！！ 発動！！ いくぞ！！ レベル3！！」
レベル3『エクソシスト！！ 迎え撃て！！』
アレン「？十字架クロス・フレイムノ炎？！！」

僕は？十字架ノ墓？に『属性変換』の『炎』を使って？十字架ノ炎
？を放つ。
喰らったレベル3は、次々に燃えていく。

アレン「なるほど… じゃあ、次はコレだ。　　？炎？『具現化』？
右腕？」

僕の右腕は純白の炎を纏う。

アレン「はあああ！！　　？放出？！！」

僕は右腕の？炎？をレベル3に向かって？放出？する。
喰らったレベル3は、徐々に？灰？になっっていく。

アレン「なるほど… ぐっ… シグナムを背負って戦ってるから、
少し疲れる… でも… これで… 終わりだ！！　　？炎？『具現化』
？纏い？。」

僕は？身体？に？純白の炎？を纏う。

アレン「【放て。 全てを灰に変える？白炎？】？殲滅の炎？！！」

僕の？身体？から、？純白の炎？を放つ。
レベル3は、全て灰になって消えました。

アレン「…………… これが… ？大切な人？を傷つけられた痛みだ！
」

四話 ?レベル4?

四話 ?レベル4?

アレ「!?!? …… どうして… どうしてここに… お前が
いるんだ…!?!? ?レベル4?!?!? …… ! まさか…!?!」
レベル4「ふふふ… 残念ながら… ?伯爵様?は『この世界』
には… 来ていらっしやらない。我々を産んでいるのは?卵?
すよ。」

僕の問いに?レベル4?は答える。

最悪だ… レベル1~3ならまだしも… ?レベル4?がいるだ
んな…!

シグナム達は大丈夫なのだろうか…

レベル4「いきますよ。『アレク・ウォーカー』」

アレ「今は… 考えても仕方ない… 来い!! ?レベル4?!
!」

僕と？レベル4？は？戦闘？を開始する。

シグナム「レベル…？4？…だと…！？」

ヴィータ「コイツが…？レベル4？…なんか…思っていたよ
り…小さいな。」

ザフィーラ「気をつける。二人共。ウォーカーの話では、奴は
小さいながら、基本値は、^{スペック}レベル3より何倍も高く、一撃で以前の
ウォーカーを再起不能まで追い込む程らしい。」

ザフィーラの言葉に二人は驚く。

シグナム「何！？ウォーカーを一撃で…再起不能だと！？」

ヴィータ「嘘だろ…コイツ…そんなに強いのかよ…人は見か
けによらねえなあ…」

レベル4「ふふふ…さあ、かかってきなさい。『アレン・ウオ
ーカー』の仲間達。」

？レベル4？は挑発してくる。

シグナム「おのれ！！　いくぞ！！　ヴィータ！！　ザフィーラ！！」
「
ヴィータ、ザフィーラ」《おう！！》「

私たちは、？レベル4？に向かって行く。

アレン「うおおお！！　？五幻式？！！」
レベル4「アレ？　どうしてキミ、他のイノセンスを使えるの？」
アレン「お前が自分で考えろ！！　？レベル4？！！　？爆雷爪？
！！」

僕は？雷？を纏った？爆閃爪？……………　？爆雷爪？を？レベル4？
に放つ。

レベル4「うわああああああ！！　……………　くそ…
が半分に…　くそ！！　『アレン・ウォーカー』！！」
身体ボディ

？レベル4？は僕に突っ込んでくる。

っていつか、まだ動けたのか!?

アレン「うわぁ!?!」

ドガアン!!

僕は地面に叩きつけられる。

……しまった……頭を地面に叩きつけた……頭が……揺れて……気が……遠くなる……

レベル4「よく頑張ったけど……これで終わりだね。さよなら。

『アレン・ウォーカー』」

アレン「……(ニヤリ)」

僕は?レベル4? に気づかれないように小さく?笑う?。

すると

シュウ……

溶けるように?僕?は消えた。

レベル4「……!?!? どこだ!? どこにいる!?!」

?レベル4?は、辺りを見渡すが、アレンの姿は見えない。

レベル4「おのれ……!?!」

アレン「?白炎?『纏い』?右腕?」

ヴィータ「げほっ！！ くそ… アイツの防御… ちっとも壊せねえ…！！」

レベル4「もう終わりですか？ 張り合いがないですね。 ……

まあ、良いでしょう。 さようなら『アレン・ウォーカー』の仲間達。」

シグナム達は、目を瞑る。

しかし、いくら待っても痛みが来ない。

目を開けるとそこにいたのは……

アレンだった。

シグナム、ザフィーラ「『ウォー… カー…？』」

ヴィータ「ア… レン…？」

レベル4「『アレン・ウォーカー』！！ 見いいいっううけえええたあああ」

アレン「？レベル4？… よくも… 僕の？大切な人？を… 許さないぞ！！ お前ええええ！！」

僕は？六幻？を振るう。

しかし、？レベル4？は、軽々と避ける。

レベル4「さようなら。 また会いましょう。 『アレン・ウォー

カー』」

そう言って？レベル4？は、その場から消えた。

そして、僕は気を失う。

五話

五話

僕は今絶望しています。

目の前に笑顔で紫色の… パスタ（煙出てます。）を手に持ったシヤマルがいるからです。

ザフィーラは気絶しています… 理由は、シヤマルの Pasta が原因です。

ザフィーラは気絶間際に『すまない… シヤマルを… 止められ… なかった… すまない… ウォー… カー…

ガクッ…』と言っていました。

ザフィーラ… シヤマルを止めようとしてくれたんですね… 早く来てくれはやて！！ シグナム！！ ヴィータ！！

アレクシヤマル… それは…？」

シヤマル「コレですか？ 腕に寄りをかけて作ったパスタです。」

やっぱり… パスタなんだ…

シヤマル「はい。 あーん。」

アレン「……………

…………… (覚悟を決めましょう… マナ… 今からそ
ちらにいけます…) あ… あーん…

その時

ドタドタ……………

パンツ…!

はやて「シヤマル…! 駄目や…! アレン君に?毒?を食わすき
か…!」

シヤマル「酷いです…! はやてちゃん…!」

ヴィータ「アレン…! 大丈夫か…?」

シグナム「ザフィーラ…! 大変だ…! ザフィーラが意識不明だ
…!」

アレン「はやて…! ヴィータ…! ありがとう…! 鎖^{コレ}を外して
ください…!」

はやて、ヴィータ「うん…! (おう…!)」

僕は鎖を外してもらった。

アレン「ありがとう。 ザフィーラ…! ?癒しの水?」

ザフィーラ「…………… うっ… ウ

オーカーか…? すまない…」

アレン「良かった… シヤマルの手料理だからわからなかったんで
すよね。 回復するかどうか。」

シャマル「アレン君まで……!!」

それから三日たったある日の夜。

アレン「散歩してきます。」

シグナム「散歩か？ 付き合っぞ?」

アレン「大丈夫ですよ。 すぐ帰ってきます。」

そう言っつて僕は、家を出る。

アレン「イノセンス発動。
アウト停止?」
? 刻盤? タイムレコード 対象空間を包囲。
? 時間 タイム

八神家に「時間の壁」を張る。

さてと、いきましようか。

*「………」
奴は何者だ?」

*「………」
わからんな。 つけてみるか。」

*「よし。行くぞ。」

彼らはアレンを追いかける。

アレン「さて… 貴方達は… 一体誰ですか？」

、「」…………… 何時から気づいていた？」

アレン「？時間停止？をする前からですね。…………… いや正確にはもっと前からですね。」

*「ならば警告だ。『闇の書』の主、八神はやてには関わるな。」

アレン「（『闇の書』？ なんだろう…）それは無理ですね。」

、「」何？」

アレン「僕は… はやての家に居候していますから。」

、「」ならば、貴様を排除するのみ！！」

アレン「やれるものなら、やってみてください！！」

そして僕達は、戦闘を始めた。

、「はあああ!!」
アレン「効きません!!」
クラウン・ヘルト「道化ノ帯?!?!」

僕は？道化ノ帯？を伸ばして『仮面の男達』を捕まえる。

、「な!? 外せない!? 『バンド』じゃないのか!?!」
アレン「あたり前です。 ?道化ノ帯？は、あなた方の言う『バンド』ではありません。 『バンドブレイク』は出来ませんよ？
さて… もうはやて達に近寄るな。 これができないなら… 今すぐ消します。」

そうやって僕は『仮面の男達』を？道化ノ帯？から解放する。

アレン「さようなら。 良い夢を…」

そうやって僕は、その場から離れる。

*「アレン君… 今良いかしら？」
アレン「ええ。 良いですよ。 お久しぶりですね。 元気でしたか？ ?女神？」
女神「ええ。 アレン君。 一緒に来てもらえますか？」
アレン「はい。 わかりました。」

そうやって僕は？女神？についていった。

天界

女神「座って構いませんよ。」

アレン「ありがとうございます。あの… 貴方は？」

*「ウォーカーさん… えと… あの… こ… こんばんは。私
は？女神様？の秘書を勤めます、？光？ともうします。」

アレン「あ… どうも。？光？と呼んでも良いですか？」

光「どうぞ。」

女神「それでは… アレン君。貴方は… イノセンスを使った時、
何か違和感を感じませんでしたか？」

アレン「違和感… ですか？ …… そう言えば… 今日、？時

間停止？を使った時もそうでしたが… 『声』が聞こえました。」

女神、光「『声』？」

アレン「はい… こんな感じです。 【我らの『声』を聞け】…
だったと思います。」

六話

六話

女神「イノセンスの… 『声』… (もしかしたら… アレン君のイノセンスは… 更なる『進化』を遂げるかも知れない…) 光！」

光「はい。ウォーカーさん。私についてきてください。」

アレン「……………？ はい。わかりました。」

そうやって僕は？光？についていった。

僕は今『天界』の『訓練所』みたいな場所に来ていた。

アレン「あの…ここは？」

光「ここは…まあ、『訓練所』だと思ってくれて良いです。」

アレン「あ、？女神？」

光「？女神様？……………では…

失礼します。」

女神「はい。ご苦勞様でした。光。」

アレン「……………？」

女神「アレン君には今から？戦闘？…戦ってもらいます。」

アレン「誰とですか？」

女神「？彼？とです。アレン君気をつけてください。？彼？は、

とても強いですから。」

*「貴様が私の相手か。」

声の方に向くと、青髪のシグナムそっくりの男の人がいた。

アレン「シグナム？ いや…違う…」

シグナム「ほう…貴様の世界では『シグナム』なのか。よかる

う。私の名はシグナムと呼べ。」

アレン「あ…はい。わかりました。？シグナム？」

シグナム「さて？女神？。この小僧の？覚醒？が終わるまで、小

僧は私と？修行戦闘？だな？」

女神「はい。そうです。」

シグナム「小僧！！！」

アレン「あ… はい!」
シグナム「いくぞ?」

そう言った瞬間、?シグナム?が消える。

アレン「……………! ? 神ノ道「遅い。」 な!?!? 「驚く暇があるのか? ずいぶんと?余裕?だな。 はっ!」 うわあ!」

ドガアン!…!

僕は?シグナム?に蹴り飛ばされて、壁に激突する。

アレン「……………!?!? 見えなかった… しかも… かなり?速い?…」

シグナム「?速い?… か。今の私が?速い?のならば… 小僧。貴様はとてつもなく?遅い?ぞ?」

アレン「だったら… 「ほう? 立ち上がるのか? しかし良いのか? 立ち上がる。と、言うことは… また?絶望?するかも知れないと言うことだぞ?」 わかってますよ… ?白炎? 「纏い? ?身体?…!」

シグナム「ほう? それが… 貴様の?力?か。 「いきます!」よかるう。 来い!」

僕は?シグナム?とぶつかり合う。

バキーン!…!

シグナム「ほう? さっきよりは?速い?ではないか」
アレン「くっ… (?白炎?を「纏い」ながら?五幻式?も使っているのに… まだ追いつけない…) うおおお!」

【……………】

シグナム「むっ…？（なんだ？ この『声』は… イノセンスか？）」

アレン「誰だ！！ 『声』の主は誰なんだ！！」

シグナム「何？（『声』の主がわかっていないのか？）」

【我らの『声』を聞け】

アレン「誰なんだ！？ お前は誰だ！！」

僕の意識はそこで途切れた。

シグナム「入ったみたいだな。？ 結界？」

私はウォーカーの周りに？ 結界？を張る。

アレン《うう…… ここは……？ 何も無い…… 白い世界？》

【我らの『声』を聞け】

アレン《また…!!》

【【我らの『声』を聞け】】

アレン《今度は… 複数… …… あなた方は誰ですか?》

【【我らは貴様の持つ『イノセンス』なり。そしてここは貴様の『精神世界』なり。】】

アレン《『精神世界』?》

【【左様なり。我らは貴様がここに来るのを待っていた。さあ?我ら?の『名』を呼べ。我らの… 正しき?名?を。さあ。】】

アレン《正しき?名?...?》

女神「じゃあ、？覚醒？は一つすれば良いんですか？」
シグナム「ああ。一つ？覚醒？すれば、その一つに反応して、残りは全て？覚醒？する。まるで、『イノセンス』の？核？である？ハート？が破壊されるみたいにな。」
女神「なるほど…」（アレン君… 頑張っ…）

アレン《貴方の？名？は… ？白^{クラウン}い道化？。》

【…………… では… 貴方に？僕ら？の？覚醒？の？力？を授けます。
】

アレン《？僕ら？？ って言うか… 僕の『声』？》

【あたり前です。 ？僕？は貴方の言う？神ノ道化？… 貴方の元々の『イノセンス』だからです。】

アレン《え！？ 貴方が… ？神ノ道化？…！？》

? 白い道化? 【…………… アレン? ? 僕? の名前は?】

アレン《あ… すみません… ? 白い道化?》

? 白い道化? 【よろしい。】

【おい!! ? 白い道化?!?! 次は俺達だぜ?】

【そうそう。】

? 白い道化? 【ああ。 すみません。 ? 六幻?。 ? 鉄槌?。】

アレン《? 六幻? に? 鉄槌? …… 神田にラビの『声』がする…》

? 六幻? 【さて… ウォーカーそろそろ『精神世界』が消える。

お前の意識はあっちに戻る。】

アレン《え? あ、はい!》

? 鉄槌? 【へ? 俺は? 俺の番は?】

? 六幻? 【貴様の出番は無い。】

? 鉄槌? 【酷!?!】

僕の意識がまた、薄れていった。

ピシッ… ピシピシッ…

シグナム「ん？ やつとか。」

ピシピシッ…

バリイン！！

私が張った？ 結界？ が破れる。

やつと？ 覚醒？ したか。

シグナム「？ 覚醒？ は終わったのか？ ウォーカー。」

アレン「…………… ええ。 たった今『精神世界』

から帰ってきましたよ。 ? 相棒？ 達と共に。」

シグナム「ふむ。 ウォーカー。 お前がここに来てから既に一週

間経っている。」

アレン「え… ええ！？ もう一週間経ってるんですか！？」

シグナム「ああ。 そうだ。 ではな。 ウォーカー。 また会お

う。」

僕の足元に突然？ 穴？ が現れる。

当然ながら僕は落ちた。

七話 『開幕ベル』（前書き）

シーザス「今回は、喧嘩から始まります。」

七話 『開幕ベル』

七話

アレン「…………… ヴィータ… 話を…」

ヴィータ「うるせえ！！ お前なんかもう知らねえ！！ 二度とあたしらの前に姿を現すな！！ こんな物… もう要らねえ！！」

ブチッ…

バリインー！！

ヴィータは、首にぶら下げていた？白いグラーフアイゼン（待機状態）？を引きちぎり、地面に叩きつけた。

？白いグラーフアイゼン？は砕け散ってしまった。

アレン「……………！ …… ヴィータ…」

シグナム、シャマル「ヴィータ！？（ヴィータちゃん！？）」

ヴィータ「ふー… ふー… さつさと出ていけ！！ 次に会ったらあたらは… 敵どうしだ！！」

アレン「…………… ヴィータ」

ヴィータ「……………」

アレン「…………… ヴィータ… 貴方がそのつもりなら… 僕は出ていきます。」

シグナム、シャマル「ウォーカー！？ (アレン君！？)」

ヴィータ「……………」

アレン「ヴィータ… シグナム… シャマル… 今までありがとうございました。」

ヴィータ「さつさと出ていけ！！ ぶつ飛ばされてえのか！？」

アレン「ヴィータ… 一つだけ言っておきます。 貴方達が危険に去らされた時… 僕は貴方達の前に現れます。 その時は… 敵どうしですね。」

ヴィータ「危険に去らされた時？ あたらが… 弱いつて言うのかよ！？」

アレン「そうです。」

シグナム「ウォーカー！！ 貴様…！！」

アレン「シグナム… 僕は貴方達を巻き込みたくは無いです。

「《ウォーカー？》」 お願ひします。 今は演技をしていてください。 シャマル。 貴方もお願ひします。 「《分かったわ。

《 因みに… ヴィータは演技なのを知っています。》さようなら。」

ヴィータ「…………… アイゼン！！ シュワルベフリーゲン！！」

アレン「……………！！ ? 白い道化?!?!」

ヴィータのシュワルベフリーゲンを? 白い道化? で防ぐ。

シグナム「紫電一閃!!」

アレン「紫電一閃!!」

シグナムの紫電一閃を紫電一閃で相殺する。

アレン「素直に行かせてはくれないみたいですね。」

ザフィーラ「はあああ！！ 守護の拳！！」

アレン「ザフィーラもですか… ? 十字架ノ墓?!」

ザフィーラの守護の拳を? 十字架ノ墓? で相殺する。

アレン「? 咎人達に、滅びの光を。 星よ集え、全てを撃ち抜く光

となれ。? 貫け、閃光! スターライトブレイカー!!」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ「な!? う… うわあああ
ああああ!!」

僕のスターライトブレイカーは、? 方舟? の内部を揺らす。

アレン「…………… 流石ですね。 シグナム。 でも… さよならで

す。」

シグナム「ハア…^{〈フンコンパス〉}ハア… 飛竜一閃!!」

アレン「? 天針?! 加護の針 東ノ罪!!」

ヴィータ「ラケーテンハンマー!! ぶち抜け!!」

ザフィーラ「はあああ!! 守護の拳!!」

僕は三人の技を加護の針 東ノ罪で防ぐ。

ヴィータ「ち… ちくしょう…」

シグナム「ぐっ… うぐう…」

ザフィーラ「うう…」

アレン「もう… 最後ですよ。 呪縛の針 北ノ罪!!」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ「うわあああああ!!」

？
「」

僕は三人を無数の針で拘束する。

アレン「さようなら。」

アレン「沢山いますね… レベル4… ?六幻?!！」

?六幻?【了解!! …… …… …… 完了。ざっと100体だな。】

アレン「了解。いきますよ?六幻?。 ?六幻式?!！」

僕の服装は、BLEACHの白一護の正解時の死覇装に?白い道化?のマントを羽織った服装に変わる。
手には、?白い六幻?(教団壊滅後)を持っている。
因みに、言葉使いは神田になっています。

アレン【六幻】「開幕ベルを鳴らせ。 ?千爪牙・影?!! ?千

爪牙・突き?!?!」

レベル4の?影?から無数の剣(爪? 牙?)が現れてレベル4を切り刻む。

俺は?六幻?を突き出す。突き出した?六幻?から、無数の斬撃が放たれる。

レベル4『何!? エクソシストか!?!』

アレン【六幻】「いくぜ。レベル4!?!」

俺はレベル4約100体に向かっていく。

シグナム「では、ウォーカーはその戦いに我々を巻き込みたくなかった。と、言う訳かなのか?」

ヴィータ「うん。だからあたしは、アレンと話し合っただけは、はやてと一緒にいる。っていう事で、あの演技をやったんだ。」

シグナム「なるほどな。」

アレン【六幻】「はあああ！！　？　咎人達に、滅びの光を。　星よ
集え、全てを撃ち抜く光となれ。　？　貫け、閃光！　スターライト
ブレイカー！！」

レベル4『ぎゃああああああああああ！！！！』

スターライトブレイカーで半分（約40体位）が消滅する。

アレン【六幻】「？六幻？！！　残りは！？」

？六幻？【ラスト20！！】

アレン【六幻】「了解。　さて、締めだな。　？雷光一閃？プラス
マザンバー！　？響け、終焉の笛？ラグナロク！　？全力全開？ス
ターライト！　？？？ブレイカー？？？！！！！」

俺の？トリプルブレイカー？が^{残り}レベル4にあたる。　^{残り}レベル4は消
滅する。

八話 新たな強敵

八話 新たな強敵

アレン【六幻】 「終わったな。 さて… 帰るか。」

カラン…

何かを蹴った。
小さな何かだ。

アレン【六幻】 「…………… 何だ？ これ？ ……………… ? 0?? ? ?
レベル0?? 何だコレ？ ? レベル0?か… 少し… 調べてみ
る必要があるそうだな。」

俺は、落ちていた？0?と書いてある板を拾う。

アレン【六幻】 「? 千爪牙・突き?!」

俺は、岩イハに向かつて？千爪牙・突き？を繰り出す。

ドガアンー！！

スタツ…

アレン【六幻】「誰だ！！ 貴様。 (人…？ いや… 違う。多分こいつが… ?レベル0?)」

***「いやあ… 危ない、危ない。危うく斬られるかと思つたよ。はじめまして… だね？」アレン・ウォーカー」。僕
は？レベル0?。」

アレン【六幻】「やはり、貴様が？レベル0?か。 …… 悔しいが… 今の俺の力では… まだ貴様には勝てない… 不本意だがな…」

レベル0「へえ… わかつてるんだ… 驚きだね。 さようなら。

「アレン・ウォーカー」次にまたお会いしましょう。」

そう言つて？レベル0?は消える。

アレン【六幻】「 …… ?レベル0? …… か… なあ… ?六幻?
?白い道化?。」

？六幻？【強いぜ。 ?奴?は。】

?白い道化?【そうですね。 ?奴?は… 強いですね。 今のま
まで勝てるかどうか…】

アレン【六幻】「 …… やはりそうか。 ぐっ… くそっ… ア
イツ… どれだけ距離リチ長いんだよ… まさか… 軌道を変えるだけ

で精一杯とはな…」

？六幻？【まさか… 俺と？白い道化？が反応出来ない速さとはな…】

？白い道化？【すみません… アレン… 僕の領域テリトリーに入ったのに動けませんでした…」

アレン【六幻】「謝る事は無いよ。 マズイ… 意識が…」

？六幻？【ウォーカー！！？】

？白い道化？【アレン！！？】

ドサッ…

俺の意識は闇に落ちた。

プルル… プルル…

ガチャ。

ヴェータ「はい。」

? 六幻? 【その声… ヴェータか!? はやてを呼んでくれ!!】

ヴェータ「? 六幻? か? 待つてくれ。今はやてを呼ぶからさ。」

? 六幻? 【できるだけ早く頼む。】

ヴェータ「あいよ。はやてー? 六幻? が変わってだってさ。」

はやて「はい。お電話変わりました。」

? 六幻? 【はやて!! よく聞いてくれ。………

……… たのんだ。……… だ。できるだけ全員で

来てくれ。……… たのんだ。】

はやて「大変や… ヴェータ!! シグナム!! シャマル!!

ザフィーラ!! 出かける準備して!!」

ヴェータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ「『『はやて?』」

主?』」(『はやてちゃん?』)『『『

はやて「病院に行くよ!!」

シグナム「病院… ですか?」

はやて「そうや!! 海鳴大学病院!!」

はやての言葉に全員が驚く。

ピッ… ピッ…

ガラッ…

?六幻? 【失礼する。 ?白い道化?。 ウォーカーは… いや…
ウォーカーの容体はどうだ?】

?白い道化? 【?六幻?ですか… なんともいえませんよ… そう
いえば… はやて達に連絡は?】

?六幻? 【連絡はした。 いつ来るかはわからんかな。】

?白い道化? 【そうですね… ありがとうございます。 ?鉄槌?
… 寝てしまいましたよ。 『戻れ』】

?鉄槌?は、アレンの?腕輪?に吸い込まれるように消えた。

?六幻? 【まさか… 意識不明の重症とはな。】

？白い道化？【ええ… 僕達が不甲斐ないばかりに… 主… アレンをこんな目に会わせてしまった… いくら？六幻？の『再生能力』でも… 一週間はかかるでしょうね。】

？六幻？【まあ… 仕方無いだろうな… 元々は、目を覚ますまで四年はかかるって話だったからな。……………？白い道化？？ 泣いてるのか？】

？白い道化？【はい… 自分の弱さが… 自分の未熟さが… アレンを守れなかった自分の不甲斐なさが… 許せなくて…】

？六幻？【…………… 俺は… 何も言えないけどさ… ウォーカーなら… こう言うんじゃないか？ いや… あの言葉『立ち止まるな歩き続ける』… 多分… ウォーカーが起きていたら… 間違いなく… 言っていただろうな。】

？白い道化？【……………！ 『マナ』との… 『誓いの言葉』…】

足音が聞こえてきた。

タッタッタッタツ……………

ガラツ！！

はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル「……アレン君！！」
アレン！！（ウォーカー！！）「……」

入ってきたのははやて達だった。

？六幻？【…………… 病室だぞ？ もう少し静かに出来ないか？】

？白い道化？【？六幻？の言っている事がありますね。】

八神家「……すみませんでした……」

？白い道化？、？六幻？【【わかったのならばよろしい。（わかったのならばよし。）】】

はやて「四年！？ アレン君は… そんなに酷い重症なんか…？」

はやてが涙を浮かべながら、俺と？白い道化？に問う。

？六幻？【医者の話によればな。？俺？の『再生能力』を使って
も一週間はかかるな。】

？白い道化？【……もつすぐ？冬？ですからね。それまでに
は完全に回復するでしょう。】

はやては安心したのか、一気に力が抜ける。

はやて「~~~~!! っつ… はあ~~~~… 良かった…」

すると

ガシッ…

アレンの腕が？白い道化？の腕を掴む。

一同「~~~~【【え…?】】~~~~」

アレン「……………皆…心配かけて…すみませ
ん…でした…」

一同「~~~~【【アレン…】】（アレン君…）（ウォーカー…）
【【~~~~」

アレン「笑って… くださいよ… はやて… ヴィータ… シグナ
△… シヤマル… 綺麗な顔が… 台無し… ですよ…」

一同（？白い道化？と？六幻？以外。）「~~~~////!!」
「」

？六幻？【??? （なんで顔を赤くしてるんだ？）【 理由がわ
かってない。

？白い道化？【フッフ… （なるほど… 皆アレンに惚れましたね。
）【 理由がわかってる。

アレン「？六幻？… 僕が目を覚ましたから… 『再生能力』は…」

？六幻？【ああ。お前が目を覚ましたから『再生能力』でいつも通り回復する。大体…一週間位だろうな。】

九話 リハビリ！！（前書き）

シーザス「予定とはかなり違います。」

九話 リハビリ！！

九話 リハビリ！！

アレンが目を覚ましてから二日がたった。

今アレンは歩く練習をしていた。

理由は？レベル0？の攻撃による下半身麻痺である。
そのため、歩く時は車イスを使っている。

アレン「うっ… くっ… なんの… これしき…！」

一歩、また一歩、と歩く度に激痛が走る。

しかし、それは全て気合いと根性でなんとかこなしている。

？白い道化？【アレン！ もう少しですよ。 頑張ってください！
！】

アレン「もっ… 少し…！ 後… 二歩… 一歩… 一歩… やっ

たー！！ 歩ききったー！！」

喜びに感動してついジャンプ（どうやったんだ…？）してしまい、
足に物凄い衝撃が走る。

アレン「……………！！ あ… あがが… 足があ…」

？ 白い道化？ 【なにをやってるんですか… アレン…】

？ 白い道化？ に飽きれ顔をされてしまう。

？ 白い道化？ に手伝ってもらって車イスに乗る。

アレン「はあ… 解放された… 後、どのくらいで足… 回復しま
すかね？」

？ 白い道化？ 【そうですね… 後… 二日でもいつも通りですね。】

アレン「わかりました。」

外出許可も出てるし、今日は『図書館』にでも行って来ましようか
ね。

図書館

アレン「くう… と… 届かない…！ はあ… はあ… （？ 白い

道化？を連れてくれば良かった…あと…少し…もうちょっと…」

そんな時だった。

*「あー！？ 貴方は！」

アレン「…へ？ …… あー！？ 君は…」

*「あの時の？ 白い人？！！」

アレン「あの時、シヤマルに？ 収集？ されていた女の子！！」

*「貴方のお名前を教えてください！！」

アレン「じゃあ、僕が名前を教えたら、君の名前を教えてくださいよ？ アレン・ウォーカーです。」

*「高町なのはです。」

こうして、僕は少女高町なのはと出会ってしまつた。

アレン「……………」

なのは「私は… 突然魔法に出会いました。 そして… 突然戦いに巻き込まれました。」

アレン「……………」

なのは「アレンさん… 貴方は？」

アレン「なのは… 僕は九歳ですよ？」

なのは「へ…？ ええー！…！？ 同い年！？」

アレン「君は… ? AKUMA? を知っていますか？」

なのは「? AKUMA? …？」

アレン「? AKUMA? とは… 暗黒物質？ ダークマター？ を？ 核？ として作られた？ 悪性兵器？ … ? AKUMA? は？ 悲劇？ と？ 魂？ と？ 機械？ を使つて作られています。 貴方達も見たでしょう？ あの異形を…」

なのは「…………… あ……………」

アレン「？AKUMA？には… それぞれレベルがあつて弱い順番からレベル1、レベル2、レベル3、レベル4、レベル5、レベル6、レベル7、レベル8、レベル9、レベル10。そして？レベル0？。今まで一番強いのが？レベル0？。僕もレベル10までなら倒せますが、？レベル0？は強すぎます。僕も負けてしまいましたから…」

なのはは驚いていた。

なのは「アレン君が負けるだなんて…」

アレン「そろそろ戻らないと石田先生に怒られてしまいますので、僕はこれで… また会いましょう。高町なのは。」

そう言つて僕はなのはから離れていった。

病室

アレン「うつ… くう… くの…！」

ガラッ…

シグナム「失礼する。ウォーカー。主からの差し入れだ。」

フルーツバスケット』だそうだ。」

アレン「つつ！ あ… シグナム。ありがとうございます。」

いつ…！！ ふう…」

シグナム「大丈夫か？ ウォーカー。リハビリは順調か？」
アレン「大丈夫です。はい。順調ですよ。？白い道化？の話
では後二日で完全に回復するそうです。」
シグナム「そうか。」
アレン「はい。」

そんな話をしていると、？白い道化？が皆を連れて入ってきた。

ガラッ…

一同『失礼します。』

アレン「？白い道化?! 皆! ようこそ。」
ヴィータ「アレン!!」

アレン「あはは。相変わらずですね。ヴィータ。」

シャマル「ヴィータちゃん? はやてちゃんの事忘れてませんか？」
ヴィータ「あ… ついでに言うとシャマルも忘れてた。」

シャマル、はやて「酷い!?!」

アレン「………… あれ? はやて?」

はやて「気がついたんかアレン君。どうや? 私歩けるようになったん
ったんよ。」

アレン「凄じじゃないですか! はやて! 歩けるようになったん
ですね!」

はやて「そうやで。だから、アレン君も頑張つてな。」

アレン「はい!」

それから二日後

アレン「やっと歩けるようになったー！ー！ー！ー！ー！」

？白い道化？【良かったですね。アレン。】

？六幻？【良かったな。ウォーカー。】

シグナム「ははは。嬉しそうだな。ウォーカー。」
アレン「当然です！ー！」

十話 気になった事

十話 気になった事

アレﾝ「ハックシヨン！！ うう… さ… 寒い…」（ガチガチ…）

シグナム「だ… 大丈夫か… ウォーカー…」（ガチガチ…）

アレﾝ「シグナムも… かなり… さ… 寒そう… で… で…
ですね」（ガチガチ…）

ヴィータ「お前ら二人共… 寒さが嫌いだったな。」

アレﾝ、シグナム「…コクコク… コクコク… コクコク… コク
コク… コクコク…」

静かに頷く僕とシグナム… とにかく寒いです…
ブルブル…

アレﾝ「でも… どうして僕はヴィータ、シグナム、シャマル、ザ
フィーラの魔法を使えるんでしょうかね？」

僕の言葉に皆が「そういうえば…」と吹いていた。

シグナム「確かにな。私の紫電一閃、飛竜一閃、陣風、空牙、シユルムファルケン、シユランゲバイセン、シユランゲバイセン・アングリフ、パンツアーガイストや…」

ヴィータ「あたしのギガントシユラク、シユワルベフリーゲン、テトリヒ・シユラク、フランメ・シユラク、ラケーテンハンマー、パンツアーヒンダネス、フェアテ、アイゼンゲホイルとか…」

シャマル「私の癒しの風、旅の鏡、風の足枷、風の護盾とか…」
ザフィーラ《我の守護の拳、鉄壁の構え、牙獣走破、鋼の軛も使えるな。》

シグナム達は自分達が使える魔法を全て言う。
こうして聞くと色々な技（魔法）を使えるな… 僕。

？六幻？【まあ、ウォーカーの？創造する力？の所載せいなんじゃないか？】

？白い道化？【そうでしょうね。 いや… それ以外に考えられませんかね。】

アレン「そうですね。」

いつの間にか寒さを忘れていた僕達であった。

アレン「？鉄槌?!?! ？判?劫火灰燼 直火判?!」
シグナム「紫電一閃?!」

ドガアアアアン!!

爆発が起こる。

アレン「紫電一閃?!」
シグナム「紫電一閃?!」

ドガアアアアン!!

また爆発が起こる。

アレン「これで…」
シグナム「最後っ?!」

一瞬の間を置いて

アレン「飛竜一閃?!」
シグナム「飛竜一閃?!」

ドガアアアアン!!

大爆発をした。

その結果二人が目覚めたのは二日後だった。

十話 気になった事（後書き）

シーザス「ガンバリマス。」

十一話 始まるそれぞれの戦い。

十一話 始まるそれぞれの戦い。

アレ「……… また… 貴方に出会うとは… できれば… 出会
いたくなかったんですけどね… ?レベル0?」
レベル0「ふふふ… お久しぶりですねえ… 『アレ・ウォーカ
ー』。少しは… できるようになりましたか?」
アレ「さあ… わかりませんね。 ?少し?くらいは… できる
ようになったんじゃないですか?」

沈黙。そして…

アレ、?レベル0?」「はあああ!」

ドン…!

力強く地面を蹴る。

ガキイイイイン！！

ぶつかり合い、激しい火花が散る。

レベル0「ほう…ならば…始めましょうか。　？我々？の戦いを。」

？断罪者？【はっ！！　気に食わねえ奴だな。】

？神狂い？【良いじゃねえか。　久々に良い『殺し合い』ができそうじゃねえかよ。】

？六幻？【元帥！！　奴はかなりの強敵です。　俺達全員でかかっても勝てるかどうか…】

アレン「それでも…　僕達は勝たなければならない。　何があっても…　絶対に！！」

一同『おう！！』

アレン「いきますよ…　？皆？！！」

一同『おう！！』

レベル0「迎え撃ちましょう…　いきますよ。　『エクソシスト』達。」

そして僕達の『戦闘』が始まる。

? 白い道化? 【? 道化ノ帯?!?!? 十字架ノ墓?!?!】

? 白い道化? が? 道化ノ帯? で? レベル0? を拘束しながら? 十字架ノ墓? を放つ。

しかし…

レベル0「効きませんよ。」

? レベル0? は無傷だった。

? 白い道化? 【くっ… 師匠!】

? 断罪者? 【仕方ねえ。 装填? 原罪の矢?!】

? 断罪者? は? 原罪の矢? を放つ。

レベル0「くっ… これは中々… 効きましたね。」

? 断罪者? 【嘘つけ!】

? 六幻? 【? 八花閃光?!】

八花閃光：閃光の速さで八花螳螂を計二十回斬りつける技。 アレ
ンと? 六幻? が使う技の中では中級クラス。

しかし…

レベル0「はあ!」

? レベル0? は片手で防ぎきってしまつ。

？六幻？【な…！？ 片手…！？】

？神狂い？【俺がまだいるぜえ？ ？デデルーパ？！！】

？神狂い？は、持っていた？刀？に炎を纏わせ？レベル0？に向かつて放つ。

レベル0「ギギギギギギ………！！！」

？神狂い？の？デデルーパ？を？レベル0？は受け止める。

？六幻？【マジかよ… あれを受け止めるのかよ…！】

アレン【六幻】「？千爪牙・突き？！！」

俺は？レベル0？の後ろに回り込み、？千爪牙・突き？を放つ。

レベル0「なあ…！！？ うわああああ…！！」

前と後ろからの攻撃で爆発する？レベル0？。
しかし…

？断罪者？【しぶといな。 まだ破壊されてなかったのか】

煙の中から現れたのは少し身体ボディに傷を受けた？レベル0？だった。

アレン【六幻】「そんな… 俺と？神狂い？の攻撃を喰らって…
ほぼ無傷だなんて…」

レベル0「甘いですね。あのくらいで私がやられる訳ないでしょ？」

アレン【六幻】「？断罪者？！！　？神狂い？！！　？六幻？！！」

？断罪者？【了解。】

？神狂い？【了解。】

？六幻？【了解。】

三人は返事を返す。

アレン【六幻】「？千爪刃・鴉羽？！！」

？断罪者？【装填？原罪の矢？！！】

？神狂い？【？デデルーパ？！！】

？六幻？【八花閃光！！】

レベル0「なるほど。個々の技が駄目なら全員の総攻撃ですか。良いでしょう。受けきる！！」

ドガアアアアン！！！！

アレン【六幻】「どうだ…！？」

？六幻？【煙で何も見えないな…】

？白い道化？【？師匠？… どう思います？】

？断罪者？【完全に… では無いが… 少しくらいダメージにはな
ったんじゃないかねえか？】

？神狂い？【同じく。】

霧が晴れるとそこには…

左腕が吹き飛んだ？レベル0？がいた。

「レベル0「危なかったですね… 危うく消し飛ぶかと思いましたがよ。」

？断罪者？【滅罪レベル三倍。 装填？原罪の矢？！！】

アレン【六幻】「？十字架ノ爪？！！」

十字架ノ爪「クロス・エッジ」：十字架ノ墓を？白い道化？の鍵爪
の数（五本）十字架ノ墓を放つ技。 十字架ノ墓一つ一つの大きさ
には違いがある。 威力はアレンと？白い道化？が使う技の中では
中級クラス。 主に攻撃に使用するが、防御技としても使える。

？六幻？【？八花閃光？！！】

？白い道化？【？破滅ノ十字架？！！】

破滅ノ十字架「クロス・エンド」：破滅ノ爪の強化版。 遠距離、
中距離、近距離の全てに対応できる技。 威力はアレンと？白い道
化？が使う技の中では最強クラス。

？神狂い？【？デデルーパ？！！】

レベル0「いつまでもやられている訳無いでしょう？　？咆哮の壁
？！！」

ギギギギギギギギイイイイ！！

ドガアアアアン！！！！

？断罪者？【あの野郎…　？咆哮の壁？とか言う技で俺達の技を防
ぎやがった…！】

？白い道化？【防御技が使えるなんて…！】

アレン【六幻】「くそつ…　しかも防御技が硬い…」

？六幻？【まさか…　滅罪レベル三倍の？原罪の矢？を防ぐとは…
なんて奴だ…　？レベル0？…！】

レベル0「今度はこちらからいきますよ。」

そう言うど？レベル0？は？断罪者？の後ろに回り込み、パンチを
繰り返す。　？断罪者？は吹き飛ばされる。

ドガアアアアアン！！！！

？断罪者？【ぐはあ！！？　ぐ…　あ…！】

？白い道化？【師匠！！？】

レベル0「次はお前です。」

? 白い道化? 【しまっ… 【? 八花閃光・波?!?!】 なっ!?!? ?
六幻?!?!?】

八花閃光・波：八花閃光を波の様にして放つ遠距離技。 使い方次第では強力な? 盾? にもなる。 アレンと? 六幻? が使う技の中では中級クラス。

レベル0「邪魔ですよ。」

しかし、? レベル0? は? 六幻? の? 八花閃光・波? を片手で弾き、
? 六幻? を吹き飛ばす。

? 六幻? 【ぐあああああ!?!!】

ドガアアアアン!!!

? 白い道化? 【? 六幻?!?!? くっ… 基本値が違いすぎる…】

? 天針? 【乗れ!!! 小僧!!!】

? 白い道化? 【? 天針?!?!? すみません!?!】

? 鉄槌? 【? 判? 劫火灰燼 『火判』!?!】

レベル0「新手か」

? レベル0? は? 鉄槌? の『火判』に向けて砲撃を放つ。 砲撃は
『火判』を簡単に撃ち破り、? 鉄槌? を飲み込む。

? 白い道化?、? 天針? 【? 鉄槌?!?!?】

? 鉄槌? 【うわああああ!?!?】

しかし

アレン【六幻】「? 千爪刃・燕?!?!」

千爪刃・燕：千爪刃の斬撃を飛ばして攻撃する。 攻守両用の技。

技の元はリボーンの山本武の? 時雨蒼燕流? 特式十二の型 右太刀『斬雨』を参考にしています。(一応)

レベル0「へえ… よく受け止めましたね。」

アレン【六幻】「大丈夫か!? ? 鉄槌?!?!」

? 鉄槌? 【うう…】

アレン【六幻】「気絶しているだけか… ? レベル0?!?!?!」

レベル0「ふふふ… 続きを始めましょう。」

アレン【六幻】「いくぜ!?!」

また俺達はぶつかり合う。

ドガアアアアン!!!!

? 白い道化? 【? 天針?!?! いきますよ!?! アレンの援護に!?!】

?天針?【了解した。いくぞ!! 小僧!!】

レベル0「邪魔ですよ。」

?白い道化?、?天針?【【な!?!】】

レベル0「はっ!!」

?レベル0?は?白い道化?と?天針?を吹き飛ばす。

ドガアアアアン!!!

アレン【六幻】「?白い道化?!? ?天針?!? くそっ…!!」

レベル0「余所見は… 禁物ですよ!!」
アレン【六幻】「ぐああああ!!?!?」

アレンは地面に叩きつけられる。

ドガアアアアン!!!

アレン「う… あ… (しまった… 頭を打った… 世界が… 揺れる…)」

レベル0「大丈夫ですかあ? ふふふ…」

アレン「くっ… (身体が… もっ… ボロボロだ…)? 白い道化?… ?道化ノ帯?…」

僕は動かせない自分の身体を?道化ノ帯?で無理に動かす。

レベル0「あはは あれえ? まだ動けたの? じゃあ… もっ

ともつと 『アレン・ウォーカー』」

アレン「【六幻】が解けた… 『奥の手』を使う訳にはいかない…
… 臨界点突破？白い道化？… ?道化ノ剣?!?!」

道化ノ剣道化ノ剣「クラウン・ブレイド」：退魔ノ剣の強化版。修行により身につけた技。魔を退ける退魔ノ剣と違って?破壊?に特化した形になっている。またの名を?破壊ノ剣?。斬撃を波動として放つ事ができる。波動は連続で五回。溜めると威力と速度、破壊力が増す。アレンが使える技の中では最強クラス。形状は退魔ノ剣と同じだが、色が退魔ノ剣とは反対になっている。

アレン「いくぞ?!?! ?レベル0?!?!」

レベル0「楽しませてくださいね。『アレン・ウォーカー』」

ドガアアアアアーン!!!

アレン「はあああ!!!」

レベル0「!!!?」

アレン「喰らえ!!! ?レベル0?!?! ?道化ノ斬撃?!?!」

道化ノ斬撃「クラウン・スラッシュ」：道化ノ剣、退魔ノ剣、爪の状態で見える。斬撃を飛ばして攻撃する。斬撃は溜める事によって威力と速度、破壊力が上がり、斬撃の数も増える。溜めなしで十、溜めありで五十になる。斬撃は、アレン(使用者)の意思で自在に操る事ができる。アレンが使える技の中では最強クラス。

ドシュッ!!!

レベル0「(斬撃?) 効きませんよ? ?咆哮の壁?!?!」

?レベル0?は?咆哮の壁?を使う。

ギギギギギギギイイイイ!!

しかし

ズバン!!

レベル0「!!?」

?レベル0?の?咆哮の壁?はあっさりと切り刻まれる。

アレン「(今だ!! この際仕方がない!!)?道化ノ演劇?!」

道化ノ演劇「クラウン・サーカス」：現在のアレン最強の技。発動するとアレンは身体に白いオーラを見纏っている。オーラのせいなのかはわからないが、この姿になるとアレンの姿が薄くなる。しかも薄くなっているこの状態は相手の攻撃をすり抜ける。さらにこの状態は技の威力が上がる。?十字架ノ墓?で?レベル0?にダメージを与えられるほど。動きまで速くなり、必ず残像が出来るほど。動きは?レベル0?でも見失うほど。すり抜けるのは攻撃だけでは無く、壁などもすり抜けられる。すり抜けられるのに防御最強。理由は?道化ノ帯?等を使用する場合に半実体化するためである。常に?白い道化?の仮面を被っている。

アレン「いきますよ。?レベル0?。?十字架ノ墓?」

レベル0「今さら?十字架ノ墓?なんて効くわけ無いでしょう。」

アレン「どうかな?」

ニヤリ…と、アレンは笑う。?レベル0?は何かあると思ひ?

十字架ノ墓？を避ける。

すると

カッ

地面が光に包まれて、消滅する。

レベル0「何！！？」

アレン「だから… 言ったでしょう？ 『わからない』ってね。」

レベル0「くそっ… ? 振動破?!！」

アレン「? 十字架ノ爪？」

? レベル0? の? 振動破? を? 十字架ノ爪? で防ぐ。

レベル0「そんな…!!? ? 振動破? が防がれた…!!?»

アレン「さあ… 終わりにしましょう!!！」

また僕達はぶつかり合う。

バキイイイン!!!!

火花が散る。

アレン「? 八花閃光・波？」

レベル0「? 真振動破?!！」

ドガアアアアン!!!!

爆発が起こる。

レベル0「何故だ!? 何故私が圧おされている!? 私は? レベル0?!」
『アクマ』最強形態!!」

アレン「? 道化ノ斬撃?」

? レベル0? に向かって五十の斬撃が放たれる。

レベル0「うわああああ!!?」

霧が晴れるとそこには左半分が無くなった? レベル0? がいた。

アレン「そろそろ終わりにしましょう。 ? 終焉ノ十字架?」

終焉ノ十字架「デスクロス」: 破滅ノ十字架の強化版。 主に近距離攻撃に使用するが、遠距離、中距離攻撃にも使用する。 道化ノ演劇以外の状態でも使用可能だが、道化ノ演劇以外で使うと身体が壊れる。 巨大な? 斬撃? で斬り刻む。 アレンの技の中では道化ノ演劇に続く最強技である。 連続使用可能だが、デメリットとして一週間まったく動けなくなる。 通常は一回使用だが、連続だと五十出せる。 ? 爪エッジ? を使うと軽く五十を越えてしまう。

レベル0「あ... ああ... うわああああ!!?」

ドガアアアアン!!!

アレン「左目発動。 『アクマ』感知起動。」

左眼: 希少技能レアスキル。 『アクマ』と『人』を区別できる眼。 幻覚魔法も見分けられる。

左眼《『アクマ』感知起動… 『アクマ』反応… 消失を確認。》

アレン「了解。速く… 戻らないと… シグナム達が… いけな
い… 速く… シグナム達の元に… ?道化ノ剣?… ?ソードス
ライダー?」

ソードスライダー：シャイニングフォース・クロス・レイドに出て
くる両手剣の技。 剣の上に乗って高速で移動する。 攻撃と移動
に使える。

僕はソードスライダーを使って一気にシグナム達の元に向かう。

アレン「シグナム… ヴィータ… シヤマル… ザファイラ… は
やて… 待っててください… 今… いきます…」

僕はシグナム達の元に向かう。

十二話

十二話

アレン「!?!? アレは… スターライトブレイカー!?!? 広域空間型のスターライトブレイカーなのか?」

スターライトブレイカーは、五人の少女に向かって放たれていた。

アレン「……………! マズイ……………! アレは… 高町なのは!?!? それにあの四人は… (なのはの親友ですかね?) 助けないと…? 道化ノ剣?!?! ソードスライダーの速度をあげますよ!?!」

道化ノ剣は速度をさらにあげる。

因みに? 道化ノ演劇? は解いていません。

アレン「(間に合え……………!?!)」

僕はそう思いながら急いでいた。

*「嘘！？ スターライトブレイカー！？」

*「あの子… 広域空間型？」

*「フェイト。 プロテクション貼ろう。 このままだとマジで落とされる。」

*「アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん。 プロテクション貼ろうよ。」

なのは「今はすずかちゃんとアリシアちゃんの意見に賛成！！」

そんなことをやっていたらスターライトブレイカーが目の前に迫っていた。

一同『プロテクション！！』

私達はプロテクションを貼ります。

すると空から白い光（閃光）が私達の前に降り立ちます。

*「はあああ！！ ？ 十字架ノ爪？！！」

五つの十字架が私達をスターライトブレイカーから守ってくれました。

聞いたことのある声と共に。

*「大丈夫ですか？ 高町なのは。また会いましたね。」

その声の主はアレン君でした。

アレン「大丈夫ですか？ 高町なのは。また会いましたね。」
なのは「もしかして… アレン君？」
アレン「はい。そうですよ。」

しかし

チャキ…

なのは以外の四人は囲む様にして、僕に『デバイス』を向ける。

アレン「……………」
フェイト「動かないでください。」
アリサ「大丈夫！？ なのは！！」
アリシア「貴方の名前を教えてください。」
すずか「貴方は… この間の？ 白い人？ ですよね？」
なのは「皆待つてよ！！ アレン君は悪い人じゃないよ！？」

皆『え？』

なのはの言葉にアリシア、アリサ、すずか、フェイトと呼ばれていた少女達は驚いていた。

アレン「……………すみません。水を指すようで悪いのですが…

『アレ』をどうにかしなくて良いのですか？」

一同『あ…』

アレン「……………」

どうやら全員、今何をするべきなのかを僕の介入によってすっかり忘れていた見たいです。

アレン「……………なるほど。大体わかりました。あの『闇の書

の主』…すなわち、はやてを止めれば良いんですね？」

なのは「はい。そうです。」

フェイト「うん。」

アレン「？道化ノ剣?! いきますよ。」

僕は『闇の書』…はやてを止めるべく、空に飛ぶ。

アレン「はやて!! 止まってください!!」

『闇の書の意志』「お前は… ウォーカーか？ 私はお前を傷つけたくはない。」

アレン「傷つけないのだったら… 止まってください!! はやて!!」

『闇の書の意志』「もう無駄だ… 時期に私は意識を失いこの世界を破壊するだろう。」

アレン「無駄なんかじゃない!! はやて!! 君自身で止められないのなら… 僕が止めてやる!! だから… もう… こんな事はやめろ!! はやて!!」

『闇の書の意志』「… もう… 止められないんだ…」

アレン「…!! 構える。 はやて。」

『闇の書の意志』「ウォーカー…?」

アレン「いいから構える!! 戦って… 目を覚ましてやる!!」

『闇の書の意志』「ウォーカー…」

アレン「?道化ノ斬撃?!」

『闇の書の意志』「つつ…!! ?パンツァーシルト(盾)?!!」

僕は?道化ノ斬撃?を放つ。 はやては?パンツァーシルト?を形成して、?道化ノ斬撃?を防ぐ。

アレン「流石ですね。(まさか… ?道化ノ演劇?を使ってるのに防がれるだなんて…) ?十字架ノ爪?」

『闇の書の意志』「デアポリック・エミッション、闇に、染まれ」

?十字架ノ爪?はデアポリック・エミッションによって相殺される。

アレン「はあああ!!」

『闇の書の意志』「吸収」

アレン「しまっ…!!?」

僕ははやてに(？) 『吸収』されてしまう。

『闇の書の意志』 「お前も… 私の中で… 永久に… 眠れ。」
アレン「意識が…」

僕の意識は闇に落ちた。

なのは「そんな！？ アレン君が…」

フェイト「吸収された…！？」

アリシア「あれだけ強かったアレンが… あんなにあっさりと…！？」

アリサ「大丈夫かしら… アレン…」

すずか「アレン君を信じようよ…」

一同『うん…』

皆アレン君を信じています。

無事に帰ってきて… アレン君…

アレン「…………… ううん… 此処ココは…？」

僕は周りを見渡す。 此処は… はやての家？ さっきまで僕は戦闘をしていて、はやての『吸収』を喰らって… それから… わからない…

そんなことを考えていると部屋に誰かが入ってきた。

ガチャ…

*「失礼… アレン！ 起きたんだね？」

僕は入ってきた人物に驚いた。

アレン「マナ…？」

マナ「おはよう！ アレン。 起きたんだね。 あれ？ どうしたの？ 信じられないものを見るような眼で人を見て。」

アレン「マ… マナ…？ ど… どうして…？」

マナ「…？？ どうしたんだい？ アレン。 あ、もしかして頭が混乱してたりするのかな？」

いきなり考えてる事を当てられた。
そんなに分かりやすい顔してましたかね？

アレン「あ… いえ… なんでもない… です…」

マナ「それじゃいきましようよ。アレン。はやて達が待っていますよ。」

アレン「はやて達が？」

僕はその瞬間に分かった。

これは

「ああ… 夢なんだな…」と。

十三話

十三話

僕は色々な事をして今はマナと二人きりで話し合っています。

マナ「楽しかったね。アレン。」

アレン「ええ。そう…ですね…」

マナ「??? どうしたんだい？アレン？」

アレン「マナ…」

マナ「???」

アレン「これは…『夢』なんですよ？」

マナ「……………うん。そうだよ。……………でも…アレン。」

ずっと…此処ここにいてもいいんじゃないかな？ 此処なら…誰も

…死なずにすむんだよ…？」

アレン「それでも…僕には…待っていてくれる人がいるか

ら…？大切な人が…？守るべきもの？があるから…だから

…僕はいくよ。マナ…ううん…父さん。良い夢を見せて

くれて… ありがとう。」

マナ「…………… そうか… ならアレン『腕輪』を。」

僕はマナに『腕輪』を見せる。

すると

キイイイイイン!!!

『腕輪』は鋭い輝きを放つ。

アレン「これは…!?!?」

マナ「アレンの?新しい力?だよ。 この?力?で… ?守るべきもの?を守っておいで。 アレン。」

アレン「マナ… …… はい!?!?」

マナ「?立ち止まるな?」

アレン「…………… ?歩き続ける?でしょ? 父さん。」

マナ「…………… 行ってらっしゃい。 アレン。」

アレン「…………… 行ってきます。 父さん。」

僕は立ち上がり?白い道化?を展開する。

アレン「この?夢?を撃ち破りますよ!?!? ?白い道化?…!?!?」

?白い道化?【ええ。 いきますよ!?!? アレン!?!?】

アレン「はい!?!?」

アレン、?白い道化?「【?道化ノ斬撃?…!?!?】

バリイイイイイン！！

僕達は？道化ノ斬撃？を使つて？空間？を撃ち破る。
その先に広がっていたのは真つ暗な『空間』だった。

*「あれ？　なんでアレン君がいるんや？」

*「ウォーカー！？　あの？夢？からどうやって脱出したのですか
！？」

アレン「え…？」

僕はそこにいた人物に驚いた。

そこにいたのは紛れもなく僕の親友、八神はやたと僕がさっきまで
戦っていた女性が今僕の目の前にいるからです。

アレン「『祝福の風』…　リインフォース？」
はやて「そつや。　な？　リインフォース。」
リイン「はい。　主はやて。」

後から出しますがリインフォース？が通称リインですが、リイン

フォース？が出るまでリインフォース？がリインです。

アレン「リイン。 此処から出ないことには何も出来ないのでは？
はやて「せやから、今この『空間』から出るから、アレン君は私に
掴まっついていな？」

アレン「わかりました。」

しかし

ドンー！！

アレン「え？」

僕は突然誰かに押されて『闇の書の闇』の中に取り残されてしまっ
た。

十四話 闇の中の自分。 『光(己)と影(己)』の戦い。

十四話 闇の中の自分。 『光(己)と影(己)』の戦い。

闇の中に取り残されてしまった僕は？影？と名乗る僕と瓜二つの少女と戦闘をしていた。

アレン「うおおおー!!」

影「……………」

バキイイイーン!!

アレン「ぐっ… ? 十字架ノ爪?!」

影「? 十字架ノ爪？」

ドガアアアアン!!

アレン「くっ… ? 影?! ! 貴方の目的はなんですか! ? 教え

てくださいい！！？判？劫火灰燼『火判』！！」

影「……………教えることは…出来ない。……………教えてほしか
つたら…私を倒しなさい。？判？劫火灰燼『火判』」

ドガアアアアン！！

アレン「くっ…（使う技・攻撃は全て同じ…どんな技を使つても全て同じ技でかえされる…これじゃ…何時までたっても…彼女…？影？を倒せない！！）？八花閃光・波？！！」

影「……………？八花閃光・波？（まだ…マナさんからもらった？力？を理解していないのか。……………アレン…速く…速く新しい？力？を使いこなしてください。闇の書の防衛プログラム…『アクマ』プログラム？レベル01（ホムンクルス）？を倒すために…）」

ドガアアアアン！！

キイイイイイン！！

アレン、影「…！！」

アレンの『腕輪』がまた光輝く。

さっきよりも強く鋭くそれでいて？優しい？輝きを放っていた。

アレン「『腕輪』が…」

さらに輝きが強さを増す。

影「（上手くいけばこのまま『武装錬金』が使える。でも…失敗したら…）マナさんから受け取った新しい？力？を使つて。

アレン。」

アレン「!？ マナから受け取った新しい？力?...!？」

『腕輪』が... 暖かい... まるで... 呼応しているみたいだ。

これが... 新しい？力?... なのか...？

アレン「.....
突撃槍ランスの『武装錬金』サンライトハート!!」

僕は？新しい力？『武装錬金』を発動する。

アレン「突撃槍!!？ うっ!？ 重い...!!」

突撃槍はかなりの重さがあった。

影「..... 突撃槍... サンライトハートが。..... アレン。」

アレン「...？」

影「合格です。 貴方についていきましょう。」

アレン「!？」

影「貴方についていくと言っているのです。 あ、それと私の名前は？影？では無く？アレス？ですから以後お気を付けて。」

アレン「えつと...？ 契約？」

アレス「？ 契約？」

僕達は『お互いの魔力（僕は純白、アレスは漆黒）』を交える。

これで？ 契約？ 終了です。

アレス「さてと！ ...？ 契約？ も済ませた事だし、此処から出よう。

アレン。」

アレン「あの... 貴女は本当にアレスですか？ ...なんかさっきまでの暗い感じは一体何処にいったんですか？」

アレス「あたりまえです。アレは全部『演技』ですよ。貴方が『武装錬金』を使える様になるまでをアレでみるのが私の役目だったからです。まあ、そんなことはさて置き…アレン！『ユニゾン』して此処から出ますよー！！」

アレン「『ユニゾン』！？」

アレス「私の本職は『ユニゾンデバイス』ですよ？」

アレン「じ…じゃあ…」

アレス「それじゃいきますよ。」

一瞬の沈黙

そして

アレン、アレス「『ユニゾン・イン』！！」

僕達の身体が光に包まれる。

十五話

十五話

アレク「…………… アレス。 なんですか？ この姿は？」

アレス「…………… わかりませんよ。 はっきり言って私は『ユニゾ
ン』をした経験自体が無くてですね… まさか… 背中に大きな純
白の翼と大きな漆黒の翼を一枚ずつ展開しているだなんて…」

アレク「…………… 本気で何も知らないんですね。」

アレス「…………… すみません…」

アレク「…………… 仕方がないですね… アレス。 どうやって脱出
するんですか？」

アレス「……………」

アレク「アレス？」

アレス「…………… アレク… あそこに… 『大きな球体』が見えま
すか？」

『大きな球体』？

そんな物… あった！

アレン「アレス！ あの少し『大きな球体』ですよ？」

アレス「アレン… アレがどんどこつちに近づいてきているってこと… わかっていますか？」

アレン「そういえば… 少しずつ近づいてきている様な… アレス。

アレスは？」

アレス「…………… アレが… 闇の書の？コア？です。」

アレン「？コア？！？」

そんなことを話していると闇の書の？コア？が僕達に急接近してきた。それと同時に僕達の身体が『光の球体^{たま}』になって闇の書の？コア？に吸収されてしまう。

アレン「うわあああああ！！？」

アレス「しまっ… きゃあああああ！！？」

僕達の意識は闇に落ちた。

二つの光が？コア？から出てくる。

ぼっっ…

シューーーー…

アレン「……………」

アレス「……………」

二人は意識が無いのか全然動かない。

しばらくして

アレス「…………… うっ… はっ！？ アレン！！ 大丈夫ですか！
？ アレン！！ アレン！？」

アレン「…………… アレス…？ アレス！？ あれ？ どうして…」

僕達は確か闇の書の？コア？に飲まれたのでは…？ どうして無事
なんだ？」

アレス「グレートアックス大戦斧の『武装錬金』 フェイタルアトラクション！！ ア
レン！！ 『武装錬金』を！！ 一気に撃ち破って此処から脱出
します！！」

アレン「あれ？ 『ユニゾン』は？」

アレス「仕方がないので『ユニゾン』はこの空間から出てからです。
」

アレン「了解！！ ランス突撃槍の『武装錬金』 サンライトハート！！」

僕達は『武装錬金』を発動する。

アレス「フェイタルアトラクション！！」

アレン「サンライトハート!!」

武器の輝きが一層強さを増す。

アレン、アレス「うおおお!! ぶち抜け————!!」

僕達は光を見た。

十六話 最後の戦い。(前書き)

今回でA・S終わりの予定です。

上手く出来たかわかりませんが間違い等があったら教えてください。

十六話 最後の戦い。

十六話 最後の戦い。

クロノ「？彼？がいないのは正直痛い。今は僕達で出来ることをやる。今現在、案は二つ有る。一つは強力な氷結魔法で氷付けにするか。もう一つは軌道上に待機しているアルカンシエルを発射するか。守護騎士達の意見も聞きたい。」

シャマル「はい。えっと多分、一つ目は難しいと思います。主のいない防衛プログラムは魔力の塊見たいな物ですから…」

ヴィータ「アルカンシエルも絶対駄目！！ あんなの使ったらはやての家が無くなっちゃうよ！！」

ヴィータが手を×にして意見を言う。

なのは「アルカンシエルって…？」

ユーノ「半径10メートルを消滅させながら進む魔道砲… って言ったらわかる？」

ユーノはなのはに説明をする。　かなり分かりやすく。

なのは「ダメダメダメー！！！」

フェイト「絶対駄目だよ！！　クロノ！！」

アリシア「なのはとフェイトの言う通りだよ！！」

なのは、フェイト、アリシアはクロノに問い詰める。

クロノ「僕だつて出来ればあんな物使いたくないさ。　守護騎士達

は他に無いか？」

シグナム「すまない…　我々は今まで暴走に立ち会った事自体が無

いのだ。　悪いが…　役に立てそうには無い。」

クロノ「そうか…」

そんな時

ピシッ…

突然何も無い空間に亀裂が入る。

全員『！！！？』

バリーイイイイン！！！！

*「ぶはあ！！　やっと出れたあ！！」

聞こえたのは『あの人』の声だった。

アレン「ぶはあ！！ やつと出れたあ！！」
アレス「ご苦労様です。 フェイタルアトラクション。 『武装解除』」

アレスが持っていたフェイタルアトラクションを『腕輪』に戻す。

アレン「サンライトハート。 ありがとうございます。 『武装解除』」

僕も持っていたサンライトハートを『腕輪』に戻す。

*「あの〜… もしかして… アレン君ですか？」

聞いた事のある声がした。
もしかして…

アレン「もしかして… なのはですか？」
なのは「やっぱり！！ アレン君だ！！」
*「君がアレン・ウォーカーか。」
アレン「…………… 貴方は？」

*「すまない。 僕の名前はクロノ・ハラオウンだ。 クロノでいい。」

アレン「わかりました。 クロノ。 じゃあ僕の名前もアレンでいいです。」

クロノ「そうか。 いきなりですまないが手伝ってくれないか？ アレを… 防衛プログラムを倒さなければならぬんだ。」

アレン「なるほど… わかりました。 手伝いましょう。 案は何があるんですか？ クロノ。」

シヤマル「今現在出ている案は、強力な氷結魔法で氷付けにするか、アルカンシエルで吹き飛ばすか。 このどちらかなんだけど…」

クロノ「もしくは君のその不思議な？力？を使って倒すか… この三つだ。」

アレン「じゃあ… 僕とアレスで防衛プログラムを倒します。 皆さんは、援護をしてください。」

シグナム「ならば我々は防衛プログラムのバリアの破壊を任せよう。」

ヴィータ「しっかり合わせろよ。 高町なのは。」

なのは「ヴィータちゃんもねー!!」

アレン「まずはヴィータ！」

ヴィータ「『鉄槌の騎士』ヴィータと『鉄の伯爵』グラーフアイゼン……」

アイゼン《ギガントフォーム》

アイゼンのカートリッジをロードして、ギガントフォームにする。

ヴィータ「轟天爆砕……！！ ギガントシュラーク……！！」

ギガントフォームのアイゼンを一気に振り下ろす。

防衛プログラムのバリアを簡単に破壊する。

アレン「なのは……！」

なのは「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン。行きま
す！」

レイジングハート《ロードカートリッジ》

なのは「エクセリオン…… バスター……！」

なのはの放ったエクセリオンバスターは二枚目のバリアを破壊する。

アレン「シグナム……！ （何か…… おかしい……）」

シグナム「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティ
ン。刃と連結刃に続くもう一つの姿」

レヴァンティン《ボーゲンフォーム》

カートリッジをロードしたレヴァンティンのその姿はまさに「」。

シグナムは弦を引きながら構える。

シグナム「翔けよ、隼……！」

レヴァンティン《シュツルムファルケン》

シグナムが矢を放つと防衛プログラムの三枚目のバリアにあたって爆発を起こす。

アレン「(あつさりすぎる…) フェイト!!」

フェイト「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・アサルト行きます!!」

バルディッシュ《ロードカートリッジ》

バルディッシュのカートリッジをロードする。

フェイト「撃ち抜け、雷神」

バルディッシュ《ジェットザンバー》

フェイトがジェットザンバーで切り裂く。

四枚目のバリアを破る。

アレン「(何故? 何故反撃をしないんだ?) はやて!!」

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの杖。 銀月の槍となるて、撃ち抜け! 石化の槍、ミストルティン!」

はやてはミストルティンを放つ。

防衛プログラムのバリアにあたったミストルティンは五枚目… 最後のバリアを貫き、なおかつ防衛プログラム本体を石化させる。しかし、直ぐに再生してしまう。

アレン「(まさか…) エクソシスト 救済者アレン・ウォーカー。 行きます。

グレートアックス 大戦斧の『武装錬金』フェイタルアトラクション!!」

僕はフェイタルアトラクションを持ちながら防衛プログラムに接近

する。

すると

くぱあ…

防衛プログラムの巨大な口が開く。

アレン「やっぱり… 『アクマ』か!! しかもレベル8(巨竜)か…」

防衛プログラムをよく見るとまさに巨大な竜である。

アレン「フェイタルアトラクション!!」

レベル8「ぎゃあああ!!」

シグナム「紫電… 一閃!!」

ザフィーラ(人型)「守護の拳!!」

ヴィータ「シュワルベフリーゲン!!」

アレン「!!!?!」

シグナムの紫電一閃、ザフィーラの守護の拳、ヴィータのシュワルベフリーゲンがレベル8にあたる。

レベル8「ぎゃあああ!!?!」

ドガアアアアン!!!

アレス「…………… 全然効いてないね。 私達の攻撃以外。」

アレン「そうですね。 フェイタルアトラクション 『武装解除』。

ランス
突撃槍の『武装錬金』 サンライトハート改!!!」

メタルシャケット
アレス「防護服の『武装錬金』 シルバースキン!!!」

僕はサンライトハート改を、アレスはシルバースキンを発動する。

アレン「アレス… シルバースキン… ? 裏返し(リバース)? アレに(レベル8)効きますかね?」

アレス「大丈夫だと思えます。」

アレン「(了解。) シグナム!!! ザファイラ!!! ヴィータ!!!

援護… 頼みます!!!」

シグナム、ヴィータ、ザファイラ「!!! おう!!!」

僕はレベル8に向かって行く。

レベル8「グオオオオオ!!!」

竜型の『アクマ』 レベル8の口から放たれたのは砲撃だった。

シグナム「飛竜… 一閃!!」

ズガガガガガガ…

ドガアアアアン!!!

相殺して爆発が起きる。

ヴィータ「ギガントシュラク!!!」

ガキイイイイン…

ヴィータ「な…!!?」

あたしは驚いた。

レベル8がギガントシュラクを片手で受け止めていたからだ。

レベル8「ギャオオオオ!!」

さっきよりもデカイ砲撃!!

ヤベえ!!

シグナム、ザフィーラ「ヴィータ!!」

シグナムとザフィーラが気づいたみたいだけど、もう走っても間に合わない!!

そんな時だった。

アレン「?道化ノ演劇?、?十字架ノ爪?」

アレンがレベル8の砲撃を十字架の閃光で破壊してくれた。

アレン「大丈夫ですか!? ヴィータ!」

シグナム、ザフィーラ「ヴィータ! 大丈夫か!」

ヴィータ「あ... ああ... 大丈夫...」

アレン「!! 来ましたよ!!」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ「!!!!」

アレンの言葉にあたし達はそれぞれの武器を構える。

シグナム「紫電... 一閃!」

ザフィーラ「守護の拳!」

ヴィータ「シユワルベフリーゲン!」

アレン「?道化ノ帯?」

ドガアアアアン!!!

シユルルル...

あたし達の技があたった後、アレンの拘束技?道化ノ帯?がレベル8を拘束した。

ビシッ!!

アレン「(よし。)アレス!! 準備OKです!!」

アレス「はい!!」^{ダブル} W『武装錬金』シルバースキンA・T?裏返し

(リバース)?!!」

レベル8「ギャオオオ!!」

レベル8の身体にシルバースキンアナザータイプが絡み付く。

シグナム「ウォーカー!! あの服はなんだ?」

アレン「無敵の防御力を誇る服: シルバースキン。」

ザフィーラ「敵の防御を無敵にしてどうするのだ!!」

アレン「大丈夫ですよ。通常のシルバースキンは外部からの攻撃を全てシャットアウトする無敵の防護服メタルジャケットですが、裏返しにすれば外部への攻撃を全てシャットアウトする無敵の拘束服ストレイトジャケットへとその特性をも裏返します。なのは!! フェイト!! はやて!! 頼みます!!」

なのは、フェイト、はやて「!!」

三人は返事をして、それぞれの準備をする。

なのは「全力全開!! スターライト!!」

フェイト「雷光一閃!! プラズマザンバー!!」

はやて「響け、終焉の笛!! ラグナロク!!」

そして

放たれる。

なのは、フェイト、はやて「!!」

放たれた砲撃はレベル8にあたる。

レベル8は半分身体が消滅している状態であった。

アレン「アレス!!」

アレス「はい!! 『ユニゾン・イン』!!」

僕達は最初に『闇の書の闇』の中での『ユニゾン』の姿になった。
因みに？道化ノ演劇？は解いていません。

アレン「？道化ノ演劇？解除。　？終焉ノ十字架？！！」

僕は？道化ノ演劇？を解除して？終焉ノ十字架？を放つ。
因みに使っているのは？爪？です。

？白い道化？【へアレン！！？　貴方は死ぬ気ですか！！？　ただ
でさえ？道化ノ演劇？以外の状態で？終焉ノ十字架？なんて使った
ら貴方の身体が壊れますよ！！？】

アレン「はあああ！！！」

斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！
斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！　斬！！

アレン「最後だ！！　欠片を残さず消えろ！！　？終焉ノ破壊者？
！！！！」

終焉ノ破壊者「デスブレイカー」：道化ノ剣、退魔ノ剣、爪、道化
ノ演劇の状態で使える技。　アレン、？白い道化？が使う唯一の収
束砲。　道化ノ演劇以外でも使えるが道化ノ演劇以外で使うとまず
確実に身体が壊れる。　？終焉ノ十字架？に続く最強技である。

ドガアアアアン！！！！

レベル8は完全に消滅した。

アレン「左眼。」

左眼へ『アクマ』探知… 完了。 『アクマ』レベル8消滅を確認。
》

アレン「ご苦労… 様… です…」

そして僕は落ちていった。意識と共に。

一話 最初の別れ。 始まり。

一話 最初の別れ。 始まり。

あれから二年が経ちました。

リインフォースは僕の『ユニゾンデバイス』になっていて、はやてには新しい融合騎『リインフォース?』がいます。

そのため、リインフォースは今『アイン』と名前を変えています。

今日は雪ですか… ブルブル… 寒い…

アレン「ハツクシヨン!! ブルブル…」

アイン「大丈夫か? ウォーカー!。 風邪でもひいたか?」

アレス「アインの言う通りですよ? アレン。 ただでさえ、まだ二年前の? 後遺症^{デメリット}?が残ってるんですからね?」

アレン「大丈夫ですよ。 アイン。 アレス。 そろそろ合流ポイントのハズなんですけど…」

遠目に見ると少女が一人、こっちに手を振っている。

なのはですね。

どうやら近くにヴィータもいるみたいですね。

アレン「いってみましょう。」

アイン、アレス「はい。」

僕達はなのは達の元に向かう。

アレン「おーい！！ なのは！！ ヴィータ！！」

なのは「やっぱりアレン君達だ！！ おーい！！」

ヴィータ「おーい！！ アレン！！ アイン！！ アレス！！」

なのは達と合流する。

アレン「しかし… 寒いですね…」

ヴィータ「相変わらず寒いのは苦手なのか。アレンは。」

*「我が主は相変わらず寒いのが苦手なんですよ。」

僕の『腕輪』… ラキが喋る。

アレン「ちよっ！？ ラキ！？ 恥ずかしいからそれは言わないで

／／／／！！」

僕は赤くなりながら否定する。

するとなのは達に笑われてしまう。

しかし僕はそこで見た。

なのはに近づくと『透明な刃』を。

危ない！！

でもなのは達はまだ気づいていない！！

アレン「なのは！… 危ない！！」
なのは「えっ…？」

ドンッ…

ブシュッ！！

なのはの目の前を血渋きが降りかかる。

アレン「がっ… はあ…」

なのは達は見た。

なんと、アレンの胸が『未確認物体』^{アンノウン}の鎌の様な刃に串刺しにされていたのだ。

アイン「ブラッディダガー！！」

ヴィータ「シュワルベフリーゲン！！」

怒りを露にしたアインのブラッディダガーとヴィータのシュワルベフリーゲンが『未確認物体』^{アンノウン}を撃破する。

アレス「アレン！！ アレン！！ 誰か！！ 速く医療班を呼んでください！！ アレン！！ アレン！！」

アレン「…………… (意識が… 深く… 落ちていく…)」

そして

僕の意識は深く闇に堕ちていった。

はやて「シヤマル… 嘘やよね…?」

シヤマル「嘘じゃないわ… アインとアレスちゃんもよく聞いてね

… アレン君は最悪の場合… 二度と目覚めないかもしれないの。」

アレス「嘘… アレン…」

アイン「ウォーカー… なんとかならんのか!! シヤマル!!

どうにか… どうにかウォーカーを目覚めさせる方法はないのか!

？」

シグナム「頭を冷やせ!!」

アイン「ぐはっ… ガクッ…」

シグナムはアインにボディープローを放ちアインを気絶させる。

アインを椅子に寝かせる。

ピッ… ピッ…

アレス「アレン…」

アイン「ウォーカー…」

ラキ「…………… まったく… 主には呆れてしまいます。まさか…

自分を仮死状態にするだなんて…」

アイン、アレス「！！？」

ラキ「…………… もう深夜ですので… そろそろ『起きたら』どっで

すか？ 主。」

アレン「…………… ばらさないでくださいよ。ラキ。」

アイン、アレス「！！？」

ラキ「フツツ… いいじゃありませんか。主。」

アレン「よくありませんよ。ラキ。お陰で逃げる羽目はめになって

しまったじゃないですか。」

ラキ「いいじゃありませんか。元々そういう作戦だったんですか

ら。」

そういう話し合いをして僕は病室から脱け出した。

アレン「…………… 《シグナム… 貴女に言いたいことがあります。
外に来てください。》」
シグナム「！！？ 《ウォーカー！！？ …… わかった。私
一人で行く。》」
アレン「《では… 外にて待っていますよ。》」

外

シグナム「ウォーカー！！ 言われた通り、一人で来たぞ。」
私はウォーカーを呼ぶ。

アレン「よく来てくれましたね。 シグナム。」
ウォーカーの声と共にウォーカーが岩の後ろから現れる。
因みにウォーカーの服は病人がよく着ている服だ。 ついさつき
まで病室で寝たきりだったから。
何故かウォーカーの身体が私より少し高い位の身長になっていた。

シグナム「話とは何だ？ ウォーカー」
アレン「実は… …… …… …… …… …… …… …… ……
それ

から… 八年後に会いましょう。」
シグナム「八年後だと！？ ウォーカー！！それにさっきの事…」
アレン「全部本気ですよ。さっき言った事も八年後会いましょう
っていう話しも全て… ね。」
シグナム「ならばウォーカー… …… …… …… …… …… …… …… ……
これが
… 私からの返事だ。」

そして僕達はお互いの近づき…

短い口づけを交わした。

アレン「さようなら。 シグナム」

そして僕はシグナムから離れる。

シグナム「ああ… 八年後に… また会おう。 ウォーカー。」

アレン「約束ですよ。」

シグナム「ああ… 約束だ。」

そして僕達は約束を交わした。

シグナム「さようなら… ウォーカー…」

何時しか私はウォーカーが消えた場所を見つめながら涙を流して
いた。

一話 最初の別れ。 始まり。(後書き)

よかったら感想ください。

一話

二話

あれからもう四年が経つ。

今は火事と『アクマ』レベル1、レベル2、レベル3に巻き込まれたとある『建物』の内部にいる。

ガララッ…

アレス「うわわっ！！ 瓦礫が危ないよ！！」

アイン「アレス。貴女はシルバースキンを着ているから大丈夫でしようが！！」

アレス「そうだけど… 一応、振動や衝撃は防げないから痛いんだよ〜」

アレン「かなり建物自体が脆くなっていますね。速くしないと…

?左眼?!?! サーチ!!」

左眼「サーチ開始。…………… この付近に一般人を一名確認。 付近にはレベル1が八十体ほどいる様子。」

アレン「了解。 アイン、アレス!!! いきますよ。 (間に合え!!!)」

アイン、アレス「はい。 (うん!!!)」

そうして僕達は一般人の元に急いだ。

少女「ひっ…………… (誰か…………… 助けて……………)」

私は目の前の異形に目がいててしまい、後ろから倒れてきた『石像』に気づくことができなかった。

少女「誰か!!!」

私は誰もいない事がわかっていたのにも関わらず、『誰か!!!』と、叫んでしまった。

そんな時だった。

*「はあああ！！　？六幻？！！　？一刀爆砕？！！」

一人の男の人が私に迫っていた『石像』を切り裂いてくれました。

*「大丈夫かい？　キミ…　名前は？」

私は名前を聞かれただけなのに『ビクッ』と、身体を震わせてしま
う。

少女「えっと…　スバルです。　スバル・ナカジマ」

*「そつか。　スバルか。　じゃあ、僕の名前を覚えておきましたよ
う。　僕の名前はアレン。　アレン・ウォーカーです。　しっかり
掴まっけていてくださいね。　スバル。　でないと振り落とされてし
まいますからね？」

スバル「は…　はいっ！！」

私はアレンさんの背中に振り落とされないようにしっかりとしがみ
つきました。

僕はスバルを連れてレベル1（約八十体）と戦っていた。

アレン「《？白い道化？。　　しつかりとスバルを押さええていてくださいね。》」

？白い道化？【わかっていきますよ。　僕を一体誰の『イノセンス』だと？】

アレン「ふふっ…　《任せましたよ。》　（本当に頼りになる…）

イノセンス発動。　？六幻？！！　？一刀斬？！！」

一刀斬：ただ横になぎ払う様にして横一線に斬撃を飛ばすだけの技。レベル10までなら簡単に切り刻める。　技の威力は最弱クラス。

？一刀斬？の斬撃はレベル1を五体飲み込んだ。

すると他のレベル1（十体程）が僕に向かって来る。

アレン「アインー！！」

アイン「はい。　闇に、沈め。　ブラッディダガーー！！」

僕に近づいたレベル1はアインのブラッディダガーによって破壊される。

アレン「アレスー！！　一カ所にコイツらを集めてー！！」

アレス「了解です！！　？水の鞭？！！」

水の鞭：身体の一部（主に腕）を水に変化させて相手を拘束する。

基本的に攻撃力は無い。　最弱クラス。

アレスは左腕で残っていたレベル1を全て捕まえてひとまとまりにする。

アレス「アレンー!!」

アレン「? 十字架ノ墓?!」

ズバン!!

集めたレベル1を全て? 十字架ノ墓? で切り裂いた。

アレン「もう大丈夫ですね。 ? クリスタルゲージ・ライフエナジ
ー?」

クリスタルゲージ・ライフエナジー：通常のクリスタルゲージと形は同じだがこれはクリスタルゲージの内部にいる者を回復することができる。 アレンが使えるミッドチルダ式魔法。 反対に内部にいる者にダメージを与える? クリスタルゲージ・ライフダメージ? が在る。

僕はスバルの周りにクリスタルゲージ・ライフエナジーを貼る。

スバル「あの… アレンさん。 これは?」

アレン「クリスタルゲージ・ライフエナジーっていう僕の魔法でね。

この中にいれば怪我とかも回復するから、そろそろ此処に人が来るだろうからその人が来るまで此処から出ちゃ駄目だよ?」

スバル「はい。」

僕は次の場所に向かった。

少女「うう… スバル… 何処…？」

私は妹を… スバルを探していました。

でも…

ミシミシ…

バキッ！！

少女「えっ…？」

私は最初、何が起きたか全然わかりませんでした。けど後から理解しました。

私のいた階段が『バキッ！！』と、音をたてて崩れ落ちていたからです。

少女「だ… 誰か！！」

私は叫んだ。
大きな声で。

そして私は見た。
一筋の白い閃光を。

*「はあああ！！　？道化ノ帯?!!!」

男の人が布を使って私を助けてくれました。
それと同時に人の様な異形が私と男の人の前に現れました。
でも、男の人は私を見て『大丈夫ですか?』と、声をかけてくれました。

アレン「はあああ！！　？道化ノ帯?!!!」

僕は？道化ノ帯？を飛ばしてスバルにそっくりの少女を助ける。

アレン「大丈夫ですか?」

少女「は…はいつ?!!!」

アレン「それじゃキミにいくつか質問があるのだけれど…　キミの名前は?」

少女「ギンガです。　ギンガ・ナカジマ」

アレン「ふうん… ナカジマ… もしかしてキミ… スバルのお姉さんかな？」

ギンガ「！ 妹を… スバルを知っているんですか！！」

アレン「知ってるよ。 さっき救助しましたから。」

ギンガ「つつ！ …… 良かった…」

ギンガの声が一瞬優しくなった。

ギンガを見ると？ 涙？を流していた。

アレン「ギンガ。 振り落とされないようにしっかりと掴まってくれたいね。 じゃないと振り落とされてしまいますからね。」

ギンガ「は… はいっ！！ …… しがみつきました！！」

アレン「うん。 それじゃ… いくぞ！！ レベル3！！」

僕は大量のレベル3に向かっていった。

アレン「装填 ? 原罪の矢?!！」

キュン!!

ドガアアアアン！！

レベル3の周囲が大爆発を起こす。

アレス「？流星キック？！！」

ドガアアアアン！！

アレスのキックでレベル3が二十体ほど破壊した。

アレス「続いて！！　？両断チョップ？！！」

ズバン！！

さらに二十体ほど破壊した。

アレス「続いて、続いて！！　？粉碎ラッシュ？！！」

ドガガガガガガ！！！！

さらに、さらに二十体ほど破壊した。

アイン「闇に、沈め。　ブラッディダガー！！」

ドガガガガガガ！！！！

アインのブラッディダガーがレベル3を三十体ほど破壊した。

アレン「そろそろ終わりですね。　【ほの白き雪の王、銀の翼もて、

眼下の大地を白銀に染めよ！』 来よ、氷結の息吹！』

僕の？氷結の息吹？により全てのレベル3が氷付けになった。

アレン「終わった。 ギンガは此処でお別れですね。 後少ししたら他の誰かが来るだろうから、その人についていってください。」

そう言って僕はギンガと別れた。

二話（後書き）

今回少し更新遅れました。

三話

三話

クロード「？火炎散弾？！！」
フレイムバレット

クロードの？火炎散弾？が無数に放たれる。
因みに？火炎散弾？はフェイトが使うプラズマバレットと同じで
炎か雷か。』の違いだけです。

アレン「？判？劫火灰燼 『火判』！！」

劫！！

クロードの？火炎散弾？に対して僕は『火判』を放つ。

ドガアアアアン！！

爆発が起きる。

アイン「『火判』であの威力… 凄いな…」

アレス「そうかな？ アレンや私にとっては普通の威力なんだけどな。」

アイン「（貴方達二人は一体何者なんですか？）」（汗）。

戦闘

クロード「うおおお！！ 今の私の最高あたしの技！！ 【召喚竜！！
我が元に来たれ！！】出でよ！！ 劫火こっかの竜！！ ？火竜？！！」

クロードの目の前に四角い魔方陣が展開され、その中から炎に包まれた一頭の？火竜？が姿を現す。

因みに？火竜？のモデルはリオレウス（通常）です。
身体は人で巨大な二つの双翼を持つ人型の竜。 体つきは女性。

？火竜？「久しいな。 クロード。 我を呼び出すとは… その者はかなりの力量の持ち主と見受けれる。 奴を倒せばよいのか？」

クロード「久しいね。 ？火竜？。 うん。 その通り。 彼はかなり強い。 全力でいくよ！！ ？火竜？！！」

？火竜？「よかろう！！ いくぞ！！ （まずは様子見） ？紅蓮？！！」

灼熱の炎が地を這う斬撃になり、アレンに向かって放たれる。

アレン「（斬撃？） ？王嵐？！！」

王嵐「オウラン」：ただ単に刀を振り回して斬撃を飛ばす技。最弱クラス。

ギギイイイイン!!!

？火竜？「ほう？ 我が？紅蓮？を弾くとは…」

クロード「……………マジ？」

クロードは？火竜？と対等に渡り合っているアレンに対し、『マジ？』と、疑問をもらしていた。

非戦闘組

アイン「…………… クロード… 彼女は召喚師だったのか。」

アレス「あれ？ アイン知らなかったんですか？ 彼女の召喚竜？火竜？は召喚竜の中でも1、2を争う攻撃力と防御力を持ち合わせた召喚竜なんですよ。」

アイン「…………… そうだったのか…」

何故か悲しみにうちひしがれていたアインでした。

戦闘組

？火竜？「？^{ヒートランス}火炎槍？!!！」

？^{あか}紅い炎の槍？を八つ程展開させてアレンに向けて放つ。

ギャン!!!

アレン「？紅蓮の盾?!?!」

ズオツ!!

？紅蓮の盾？は？火炎槍？が触れたとたん？火炎槍？を吸収して
しまった。

？火竜？「何!!?!」

クロード「マズイ！　？火竜?!?!　下がって!!」

？火竜？「!!?!」

アレン「いい判断ですが…　手遅れ。」

アレンの右手になのは、フェイト、はやての三人の魔方陣が重なっ
て展開されていた。

アレン「輝け！　閃光！　？エターナルブレイカ?!?!」

エターナルブレイカ：なのは、フェイト、はやての三人のブレイカ
ーの魔方陣を重ねて右手に展開する。　三人のブレイカーを混ぜて
放つ収束砲。　なのはのスターライト、フェイトプラズマザンバー、
はやてラグナロクの三つのブレイカーの性質を持つ。　威力は最強
クラス。

？火竜？「な…!!?!　　うわあああ!!?!」

クロード「うわあああ!!?!」

収束砲は二人を巻き込みながら着弾地点で巨大な爆発が起こる。

ドガアアアアン！！！！！！

アレン「…………… しまった… 大丈夫ですか！？ クロード！？」

火竜？！」

クロード「…………… 大丈夫…」

？火竜？「ケホッ！ ケホッ！ …………… 我もなんとか大丈夫だ。」

四話

四話

ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空よりさらに

上空

アレン「うわあ… 数が多いですね…」

アレス「あのガジェットドローンっていう機械… 色々種類があるね。あの小さい長丸みたいなのが？型。鳥みたいに飛行してるのが？型。で、最後の大丸みたいなのが？型だね。確か魔力結合を消す事によって魔法を無効化させるフィールド… AMF通称アンチマギングフィールド。リニアにいるリインは大丈夫みたいだね。他の四人は… 少し心配だけどね…」

アイン「リインか… 懐かしいな。（はやては元気にしているのだろうか。）」

クロード「あの四人の内、青髪の女の子とオレンジ髪の女の子が一緒のチームみたいだな。あの二人は中々やるな。あっちの赤髪

の男の子とピンク髪の女の子はまだまだ幼い。 訓練を積みめばもっと強くなれるだろう。」

アレン「クロードはなんで解説してるんでしょうね？ …………… やっぱり増援が来ましたか。 しかも増援は… 『アクマ』！ なのは、フェイトの所にはレベル3が約百体ずついますね。 リニアの所にはレベル4が一体… アイン！ アレス！ クロード！ 貴女達三人はなのはとフェイトの所に。 僕はリニアにいきます。」

アイン、アレス、クロード「「了解！！！」」

僕達はそれぞれの場所に向かう。

ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空

なのは「これは… 『アクマ』！！？ 数が多い…！ フェイトちゃん！」

フェイト「なのは！ コレ全部『アクマ』みたいだよ。 ロングアーチの連絡では私達の所にはレベル3が約二百体いるみたい。 F W陣の所にはレベル4がいつてるみたい！」

フェイトの言葉になのはは顔色を変える。

なのは「レベル4！！？ 急がなきゃ！ でも…」

レベル3はなのは達を囲む。

フェイト「素直に行かせてはくれないよね…　なのは！」
なのは「うん！　行こう！　フェイトちゃん！」

私達は『イノセンス』を発動させてレベル3の群れに向かって行きました。

リニア上部

レベル4「ふふふっ…」

スバル「何…！？　ガジェットじゃない!？」

ティアナ「もしかして…　なのはさんやフェイトさん、はやてさんが言っていた『アクマ』っていう機械がコレなんじゃ…」

キャロ「エリオくん…」

キャロがリニアに乗っていたエリオに声をかける。　するとエリオは…

エリオ「!!!　危ない！　キャロ!!」

ドンッ!!

キャロ「えっ…?」

ドガアアアアン!!

エリオ「う… あ…」

私はフリードの背中に倒れ込みましたがエリオくんの方を見るとエリオくんが岩に叩きつけられていました…

スバル「エリオ!?!? アイツ… 今… 何をしたの!?!?’

スバルの言っている事が最もだ。

次の瞬間

『アクマ』がスバルの目の前にいつの間にか移動していた。

スバル「速い…!?!?’

スバルに『アクマ』の拳が当たる寸前

バキイイイイン!!!

スバルの前に一人の男の人が立っていた。

*「久しぶり… いえ… 四年ぶりですね。 大きくなりましたね。

スバル。」

ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空

なのは「『装填』　？原罪の矢？！！」

ドガアアアアン！！

フェイト「？二幻刀？！！」

ズバン！！

なのはは？断罪者？で、フェイトは？六幻？で『アクマ』を撃退していたが『アクマ』は一向に減らない。

なのは「いくら倒してもキリがない……」

フェイト「転送されてる……？　根元の方を叩かないと直ぐに転送されてくる。」

なのは「でも……数が多すぎるよ……このままだと……」

私達の目の前にレベル3が三体来ていた。

その時

*「ブラッディダガー！！」

*「？道化ノ帯？！！」

ドガアアアアン！！！！

聞き覚えのある声と共に三人の女性が降りてきた。

*「八年ぶりだな。　高町。　テストロッサ。」

*「八年ぶりだね。なのは。フェイト。話は後だよ。今は
… コイツらを倒さなきゃ。」

リニア上部

アレン「久しぶり… いえ… 四年ぶりですね。 大きくなりましたね。
スバル。」

スバル「アレンさん…?」

アレン「離れていてください。 ? 十字架ノ墓?!」

レベル4「おやつ? 貴方は…」

ドガアアアアン!!!

ティアナ「スバル!!!」

スバル「ティア!!!」

ティアナ「あの人が… あんたが何時も話してた…」

スバル「うん。 アレンさん。 私の… ? 憧れの人?」

アレン「? 血塗られた十字架?!」

血塗られた十字架「ブラッディクロス」：？紅の十字架？　？紅
い十字架？。　？血の十字架？。　等数々の名前を持つ。　真紅に
染まる紅い十字架。　ある意味どんなものでも破壊できる。　？道
化ノ演劇？、？道化ノ剣？、？退魔ノ剣？の状態でも使える技。
最強クラス。

ズバンツ！！！！

レベル4「！！！！？」

レベル4は消えた。

ミッドチルダ郊外、リニアレール付近上空

アレスメタルジャケット「防護服の『武装錬金』シルバースキン！」

アイングレートアックス「大戦斧の『武装錬金』フェイタルアトラクション！！」

*「クロススピア十文字槍の『武装錬金』激戦！！」

三人は『武装錬金（？）』という武器を展開してそれぞれ武器を構
えています。

リニア上部

スバル、ティアナ、キャロ「アレンさん！！」

アレン「三人共。この少年…スバル達の仲間かな？かなり怪我をしていたので…？クリスタルゲージ・ライフエナジー？の中に入れておきましたけど…完全に回復するまでにはもう少し時間が必要ですね。」

スバル「エリオは大丈夫なんですか？」

スバルが心配そうに聞いてきた。

アレン「大丈夫だよ。エリオの命に別状は無いよ。エリオの怪我は時間が経てば治りますから後は医療班に任せれば大丈夫でしょう。」

スバル、ティアナ、キャロ「よかった……」

そしたら『ピタッ』と顔に小さな小人がくっついた。

*「ふええええええん！！アレンお兄さん！！会いたかったですうーーーー！！」

顔にくっついていたのはリインだった。

アレン「リイン…離れて…息が出来ない…苦しい…」

リイン「あわわっ！！すみません！！アレンお兄さん。」

リインは素直に謝ってくれた。

これが僕達の再開だった。

四話（後書き）

今回出せなかった人物は次話かその後に出したいと思います。

五話

五話

ある部屋にブラインドからの一筋の光が差し込む。

アレン「……………ん… 朝日… あれ…？」

*「すう… すう…」

アイン「すう… すう…」

アレス「ZZZ…」

一人… 二人… 三人… 四人… 五人… 五人？

あれ？ なんで五人居るんだ？ 一人目アイン（僕）、二人目、三人目、クロード四人目、五人目（？）… 五人目？ 誰だろう？

僕はそおつと布団を取ってみた。

果たして、そこに居たのは…

アレン「…………… どうして… シグナムが… 此処に…？」

そこに居たのはシグナムでした。
因みに、僕達は『機動六課』の部屋を一部屋ひとへちや借りてそこに四人で寝ている。

シグナム「……………う…う…ん…？起きていたのか…ウオーカー…」

アレン「あはは…おはようございます。シグナム。」

アレス「ふわぁー…むにゃむにゃ…むにゅ？おはよう…

アレン…」

アレン「おはようございます。アレス」

アイン「……………ん…ふわぁ…おはようございます。ウォー

カー。……………何故…将がこの部屋に居るのですか？」

シグナム「何を言っているのだ。お前が入っていいと言ったのではないか。」

アイン「??? 私は言っていないぞ？」

シグナム「何？じゃあ一体誰が…」

クロード「私だよ。」

今さっきまで寝ていたハズのクロードがいつの間にか起きていた。

アレン「今日は『囑託魔道師』の試験ですよ。速く準備をしない

といけませんよ。」

アイン、アレス、クロード「はい。（はい。（おう）」

」

アイン達が返事をする。

シグナム「そうか。お前達は『囑託魔道師』の試験を受けるのだ
つたな。」

アレン「そうです。　そういえば…　模擬戦の相手は誰なんでしょうね？　昨日はやてに模擬戦の相手を聞き忘れてましたから」
シグナム「私は出来ることならウォーカーと戦いたいかな。」
クロード「シグナムもか。　私もアレンと戦いたいね。　あ、でも私は試験管じゃないから無理か。」
アレン「ウォーミングアップしましょうか。　シグナム訓練所の様な場所…　ありませんか？　ウォーミングアップをしたいのですが…」
シグナム「???　何故だ？　方舟？を使えば良いであろう。」
アレン「？方舟？は出来れば使いたくないからです。　今は理由を言えませんが、？方舟？は今現在、使用厳禁なんです。　だから訓練室を貸して頂けたらな…　っと。　言う訳です。」
シグナム「なるほど。　わかった。　主に相談してみよう。」
アレン「ありがとうございます。　シグナム」
シグナム「礼など要らん。」

僕達は部屋を後にした。

アレン「せいっ！…　はっ！…　ていやっ！…　はあっ！…」

クロード「ていつ!! せやつ!! らあつ!! おりゃあつ!!」

蹴り。突き。突き。回し蹴り。

アレン「隙あり!! せいっ!!」

クロード「ぐううっ!!」

アレンの? 正拳突き? がクロードの腹部に上手く決まる。

アイン「一本! それまで!! アレンの勝ちですね。」

アレス「組手強いね。アレン。」

クロード「負けたか… まっ、仕方ないけどさ。」

アレン「? キュア?」

キュア：回復魔法。 ミッドチルダ式魔方陣。 多少の傷なら傷痕を残さず綺麗に回復させる魔法。 使用中は対象者の身体が光に包まれる。 自分を対象者にする事は出来ない。 アレンが使う回復魔法の中では最高クラスに部類されている。

クロード「相変わらず凄い回復魔法だな。」

アレン「まだまだですよ。」

こうして僕達は試験を明日に備えて訓練を始めた。

六話（前書き）

久々の更新です。あまり覚えて無い。

皆様どうか、暖かい目で見守ってください。

六話

六話

試験場

アレン、シグナム「紫電… 一閃!!」

ドガアアアアン!!!

一度目の爆発。

アレン「? 十字架ノ爪?!」

シグナム「陣風!!」

ドガアアアアアン!!!

二度目の爆発。

アレン「? 血塗られた十字架?!」

シグナム「飛竜… 一閃!!」

ドガアアアアアン!!!

三度目の爆発。

アレン「はあああ!!」

シグナム「はあああ!!」

ギイイイイイイン!!!!
火花が散る。

アレン「流石ですね。シグナム!!」

シグナム「流石なのは… お前も同じだろう? ウォーカー!!」

ギイイイイイイン!!!!
さらに火花が散る。

アレン「?判?劫火灰燼『火判・蒼』!!」

?判?劫火灰燼『火判・蒼』:ただの『火判』が蒼になっただけ。
性能に変化はない。

シグナム「紫電… 一閃!!」

ドガアアアアン!!!!

しかし、シグナムは…

シグナム「はあああ!!」

アレン「なっ!!? そのまま突っ込んできた!!?」

ドガアアアアアン!!!!

ビルに吹き飛ばされる。

シグナム「どうだ!!」

レヴァンティン「手応えはありました。」
シグナム「そうか…　しかし、十分に警戒を…!!?」

ゴアッ!!

? 蒼い火判? が私の目の前に放たれていた。
私はとつさにパンツァーシルトで防御をしていた。
しかし、ウォーカーの狙いは盾を張った瞬間だった。

アレン「御返おかえしだ!　紫電一閃!!」

シグナム「しまっ…!!」

ドガアアアアン!!!

私はビルを二つ貫通した。

アレン「ラキ!　シグナムが今のでやられるとは思えない。　? 紅

蓮?…　展開出来ませよね?」

ラキ「上等!!　私を誰のデバイスだと思って?」

アレン「ふふっ…」

ラキ「? 紅蓮?」

紅蓮: ? 紅の炎? を使って『武装』の様なものを造り出す。　これ
よって造り出された『武装』は自分の意思によって自由自在、変
幻自在である。　身に纏ったり、『武器』として使ったりと以外に
様々な使い方ががある。　魔力結合を分断する力がある。　コレ自体
に魔力は必要ないため、AMF濃度の高い場所でも使うことが出来
る。　纏わせた部分(部位)の身体能力を飛躍的に上昇させること
が可能である。　使用者はアレン、アレス、アイン、クロード、ラ
キの五人(正確には四人と一個)が今の所使えますが、アインとク

ロードは未完成な上に負担がかなりかかってしまう。最強クラスに部類されている。

僕は？紅蓮？を身体に纏う。

試験場観覧所

はやて「アレン君凄いなあ… アレスちゃん。アレは『火判』のバリエーションか何か？」

アレス「そうですね… 簡単に説明すればバリエーションですね。」
アイン「そういえば… 私はウォーカーの『火判・蒼』を直に見るのは初めてだな。」

アレス「そうでしたか？ レベル7との戦闘の時に確か幾度か見ているハズですが…」
アイン「そうだったか？」

アレスの言葉にはやてが…

はやて「ちょっと待って… レベル7!? そんな『アクマ』居るんか!？」

アレス「居ますよ。」

試験場

シグナム「なんだ？ アレは…？」

レヴァンティン「魔力反応がありません。魔力を使用した技ではなさそうです。」

シグナム「何かはわからないが… 攻撃しなければ負けだ！！ 紫電… 一閃！！」

私は紫電一閃を使ってウォーカーに攻撃をする。

しかし

ガキイイイイイン！！！！

シグナム「何っ！！？」

ウォーカーの？紅の炎？に防がれてしまう。

しかも、それだけではなかった。

紫電一閃の炎が『かき消された』のだった。

アレン「驚くのは… まだ早いですよ！！ 発動！！ ？断罪者？

！！ 『装填』？紅蓮の炎？！！」

『装填』？紅蓮の炎？…？断罪者？の？原罪の矢？に？紅の炎？を纏わせて放つ技。 威力は？原罪の矢？の約三倍。

キュン

シグナム「つつ！！？ 早い！？」

ドガアアアアン！！！！

シグナム「なんて威力……！！ 紫電…… 何……！？」

私は目を疑った。

アレン「……何れに当てるつもりですか？」「……」

ウォーカーが五人に分身していたのだ。

シグナム「これでは…… 何れが本物のウォーカーなのかわからない

……！！」

アレン「……デイベイン……」

キュアアアア……

シグナム「何！？ コレは……！」

試験場観覧所

なのは、フェイト、はやて、スバル「……アレは…… デイベイン
バスター……！？」

なのは、フェイト、はやて、スバルの順番に驚くが、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラの三人は…

ヴィータ「まあ、不思議じゃねえな。」

シヤマル「そうですね。」

ザフィーラ「彼奴は我らと主はやて、テスタロッサ、高町の技を使える上に、多分だが…今の彼奴はスバル、ティアナ、キャロ、エリオの技も使えるだろうな。」

スバル、ティアナ、キャロ、エリオ「……えええっ!!?!?」「……」

FW陣四人は驚愕していた。

試験場

アレン「……バスター!!!!」「……」

ドガアアアアン!!!!

シグナム「紫電… 一閃!!」

ギャギャギャギャ…

シグナムは紫電一閃で難なくディバインバスター×5を突破した。

シグナム「はあっ!! はあっ!! …… ウォーカー。これ

では最後の1撃にしないか？」

アレン「！（クロードの時と一緒…） いいでしょう。 最後の1撃 ? ソレ
?… 受けましょう。」

沈黙

アレン、シグナム「はあああ…！」

お互いに地面を蹴り、ぶつかり合う　　ハズだった。

なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ「
「「「《ストップ！》」「」「」

僕はなのは、フェイト、ヴィータ、シャマル、ザフィーラのバイン
ドで止められてしまった。

シグナムははやてに何故か説教されていた。

アレン「何故止めるんですか！！　これから？ エターナルブレイカー 最後の1撃？で終わ
らせるつもりだったんですよ！？」

なのは「アレン君の実力は皆わかったから、もう、試合終了だよ。」

アレン「仕方ありませんね…　シグナム！　決着はいずれ…」

シグナム「ああ。　いずれ…　必ず。」

六話（後書き）

次話は試験の結果とアレンが隊長を勤める部隊の部隊メンバーとメンバー構成を書こうかなと思っています。

アレン「僕が隊長ですか？」

うん。俺も頑張る。部隊名も考えないと。

アレン「頑張ってください。」

因みに、大まかにアレス、アイン、クロードはアレンの部隊に入れるつもりだからね。

アレン「まさかの意外なメンバーが！」

七話

七話

僕ははやて達の元に集まっていた。

アレン「それで… 僕の試験結果はどうなったんですか？」

はやて「うん。 アレン君は合格。 文句無しや。」

アレン「かなりあっさりですね。 本当なんですか？」

アレス「本当らしいよ。 なのは、フェイト、はやての話でもアレンは戦闘だけ見ても申し分無いらしいし、筆記試験はほぼ満点、しかも、召喚竜が？ 火竜？ だからね。 非の打ち所がない感じらしいね。」

フェイト「まあ、そんな訳で、アレンは今日から晴れて囑託魔道師だよ。 それから」

はやて「フェイトちゃん。 そこからは私が言うで。 実はな、アレン君。 アレン君が試験をしていた時に皆で決めただけだね？」

アレン君の部隊を決めようかと思っとなるよ。 勿論、隊長さん

はアレン君や。今のところ、主なメンバーは、アレン君、アレス、アイン、クロードさんの四人や。他のメンバーも居るんやけど、顔合わせはまた今度な。今は、FW陣との自己紹介や。」
なのは「それじゃあ、FW陣の皆。自己紹介をしようか？」
FW陣『はいっ！』

ティアナ「じゃあ私から…ティアナ・ランスター二等陸士です。

先日は相棒のスバルが危ない時、助けて頂いて、ありがとうございます。」

エリオ「エリオ・モンディアル三等陸士です！先日は怪我を治していただきました。どうも、ありがとうございます！」

スバル「スバル・ナカジマ二等陸士です！四年前と先日はありがとうございました！」

キャロ「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。それから、友達のフリードリヒです。」

アレン「それじゃあ最後は僕ですね？僕はアレン・ウォーカーです。つい先程、囑託魔道師+隊長になったばかりです。それから、一応、肩書きは囑託魔道師なので、名前の呼び方等は何でもいんですよ。後、囑託魔道師なので敬語等は無しですよ？」

はやて「それじゃあ…アレン君の部隊の名前を決めなあかな。

因みに、なのはちゃんがスターズ、フェイトちゃんがライトニングの隊長さんで、私がロングアーチの隊長さんや。それからアレン君の部隊は主にイノセンスを使って『アクマ』を倒すのが目的で、

損傷したイノセンスの修理等、その他色々がアレン君の部隊の目的
なんや」

アレン「なるほど。 (しかし まるで『黒の教団』の科学
班とエクソシストみたいな仕事ですね… ん？ エクソシスト？)
エクソシスト…」

誰かが僕の一言（小声）を聞いてきたそうです。

八話

八話

あれから一週間後

アレン

「疲れた… 早く眠りたい…（でも、報告書が… 他にも… 嗚呼… 鬱になりそう… 頭が痛い…）クロード…？ 大丈夫ですか…？」

クロード

「大丈夫… じゃない… 物凄く… 気持ち悪い…」

死にそうにしているクロードがいた。

アイン

「まさか、これだけで… 約3日は動いた位に疲れるだなんて…」

アレス

「うーん…頭痛いよ…アイン…薬…」

アイン

「すまない…昨日で全部無くなってしまった…我慢してくれ…」

アレン

「なのはがイノセンスを壊されて、その修理…疲れたよ…」

クロード

「確か…？断罪者？だよな…半壊だったよな…つか、聞いてねえぞ？>ノアの一族が居るなんて…」

アレン

「どうやら、ノア達も此方に迷い込んだ見たいです。今のところ、「伯爵」が居ないだけ、まだマシですね。」

アイン

「今回、高町を襲ったノアは、自分を「ティキ・ミック」と名乗ったそうです。」

アレン

「テイキが…」（「ロード」が来てないとすると…まだ、あつちは上手く、集まって無い？ うーん…わからない…）」

アイン、アレス、クロード

「主？（アレン？）」「」

心配そうにアイン達は、僕の顔を覗き込んだ。

アレン

「大丈夫です。 今度のなのはの任務… 僕も同行します。」

みんな「やっぱり。」といていた。

八話（後書き）

最高に短いですね…

短さだと最高記録ですね…

ハア…

九話「15番目」のイレギュラー

*
「よっ！ ひさぶりだなあ。」 少年
「

アレン
「「テイキ・ミック」……！」

？六幻？
【ちいっ！！ ノアか！ なんでこんなところに……！？】

なのは
「アレンくん！ その人は
「

アレン
「わかってますよ。 なのは。 テイキの「メモリー」、
「快楽」
は「この世の万物」を選べる能力。 ？白い道化？！！ ？断罪者
？！！ ？六幻？！！ アレス！！ アイン！！ クロード！！
なのは！！ …… いきますよ……！！」

皆

『『『おう…!!』』』

ティキ

「来いよ。少年。また、あの時見たいにもぎ取ってやるよ。その左手を…!!」

僕とティキがぶつかった。

アレン

「?十字架ノ墓?!?!」

ティキ

「ティーズ!!」

僕の?十字架ノ墓?はティキの「食人^{キャニバル}ゴレム」ティーズによって防がれた。

前よりティーズの耐久力が上がっている…!!?

一撃で壊せない…!!

テイキ

「知ってた？」「今の」「千年公」の目的。」

？断罪者？

【装填！ ？原罪の矢？！！】

テイキはティーズで造り出した盾のように物で？断罪者？の？原罪の矢？を防いでしまった。

？断罪者？

【何っ！？】

テイキ

「少年の隣に居たあのシグナムって女。 彼奴が狙いなんだぜ？

意味、わかってるか？

少年は足止めされてんだよ。 「千年公」がそいつを狙ってんのはそいつが「15番目」の「ノア」、 「リンネ」の「空間」の「メモリー」を継承してるらしいぜ？」

アレン

「！！！？ シグナムが…」「15番目」「…？」

？六幻？

【？八花螳螂？！！】

？白い道化？

【？血塗られた十字架？！！】

？断罪者？

【装填！ ？紅蓮の矢？！！】

アレス

「フェイタルアトラクション！！」

クロード

「サンライトスラッシュャー！！」

アイン

「ブラッティダガー！！」

皆僕らの会話を横目にティキに一斉に攻撃した。

アレン

「皆…!?!」

? 白い道化?

【まったく貴方は… 向かいなさい。 シグナムの元へと。】

? 断罪者?

【こいつは俺達がなんとかする。 だから行け。 シグナムの元に。】

アレン

「わかりました。 すみません。」

なのは

「アレンくん! 私と一緒に!」

アレン

「わかりました。 急ぎましょー!」

僕達はシグナムの元へと急いだ。

シグナム

「誰だ貴様は!？」

*

「どうも 我輩は「千年伯爵」。 名前だけならアレン・ウォーカーから聞いていると思えますが?」

シグナム

「貴様が「千年伯爵」…!」

千年伯爵

「貴女には「メモリー」が継承されている。 その「メモリー」はまだ「覚醒」していませんがね。」

シグナム

「……………何が言いたい?」

千年伯爵

「貴女に我々側に来ていただきたいのです。」

シグナム

「断る!!」

アレン

「よく言ってくれましたね。シグナム。」

シグナム

「ウォーカー!!」

千年伯爵

「おやおや。貴方はテキぱんに任せておいた筈ですが…?」

アレン

「? 白い道化? 達が引き受けてくれました。伯爵」…!」

なのは

「アクセルシューター!!」

なのはが突然、アクセルシューターを展開した。そしてそのまま…

なのは
「シュート!!」

伯爵に向かってアクセルシューターを放つ。

千年伯爵
「効きません。」

伯爵が手から放った「黒い塊」がアクセルシューターを全て消し去った。

なのは
「くっ…!!」

シグナム
「ウォーカー! 彼奴が… 「千年伯爵」なのか?」

いつの間にか隣に居たシグナムが聞いてきた。

アレン
「ええ。 そうです。 彼が… 「千年伯爵」です。」

九話「15番目」のイレギュラー（後書き）

オリジナル「ノアメモリー」出しました。

オリジナルのノア、リンネは「空間」を自在に操る力を持っていてそのため、「空間」の「ノアメモリー」の継承者です。

実際、誰を「15番目」にしようか考えた結果、シグナムになりました。

十話 シグナムの「覚醒」

アレン

「伯爵…！」

シグナム

「なあ、ウォーカー。「ノア」とはなんなのだ？

私は伯爵に「お前が「15番目」です。」といわれたのだが…」

アレン

「「ノア」と言うのは選ばれし「13人」が「ノア」として覚醒するのですが…」

「僕…や「シグナム」…のように「イレギュラー」として「14番目」、「15番目」の「ノア」が何故か「覚醒」したらしいです。」

シグナム

「……?…?…?…」

シグナムはわかっていないのか、頭に「?マーク」をいくつも浮かべていた。

千年伯爵

「ラッキーですねえ… こんなところで」「14番目」と「15番目」を見つけていることが出来たんですから。」

アレン

「くっ!!!(どうする!?) なのはの?断罪者?は一応なおっているけどなのは自身が魔法しか使わないならば、伯爵にはまず勝てない… 一体どうすれば…!)」

なのは

「デインバスター!!)」

なのはの桜色の閃光が伯爵に向かって放たれる。

千年伯爵

「当たりませんよ。」

なのは

「当たらないなら、当てます。」

デイバインバスターの軌道が変わり、伯爵の周りを回り始めた。

なのは

「アレンくんがなくなってから私達は何もしなかったわけじゃないよ。」

少し位は力をつけたんだから！」

デイバインバスターの光が強くなったと思ったらデイバインバスターが突然五つに分裂して伯爵に命中した。

アレン

「！」

なのは

「デイバインバスター「バースト」！」

アレン

「……………戦いましょう！ なのは…… シグナム……！」

なのは、シグナム

「うん（ああ）……」

千年伯爵

「やってくれましたねえ……」

アレン

「ストライクバスター！」

ストライクバスター：なのはのデイバインバスターを元にした技。機動性と貫通性に優れているが威力自体はあまり強くない。

シグナム

「飛竜一閃！」

なのは

「デイバインバスター「バースト」！」

ストライクバスター、デイバインバスター「バースト」、飛竜一閃の三つの技が一つになって伯爵に放たれる。

千年伯爵

「ほい。」

しかし、伯爵の力でかき消されてしまった。

アレン

「くっ…！」

シグナム

「うっ…！？（なんだ！？ 体が… 熱い！？ 一体なんなんだ！
！？）」

なのは

「？断罪者？！！ シュートブラスト！！」

シュートブラスト：断罪者を用いて放つ技。

ディバインバスターより威力が高く貫通性に優れているが機動性がほとんど無く、熟練者でも自在のコントロールは難しい。

因みに？断罪者？の弾丸を魔力で包み込み使用する。
だがそれにより追尾性能が消えてしまった。

千年伯爵

「おっとつと。 危ない、危ない。」

しかし、かわした伯爵の後ろからさらに追撃と言わんばかりにシユートブラストが伯爵を狙う。

なのは

「当たれー!!」

伯爵に攻撃が命中した。

シグナム

「うわあああ!!!!」

アレン

「シグナム?!」

突然、シグナムが苦しみだした。

シグナム

「あああああああああああああつ!!!!!!!!」

アレン

「シグナム!! シグナム!!」

千年伯爵

「覚醒が始まりましたね。」

アレン

「そんな…?! シグナム！ シグナムっ…！」

シグナム

「ウォー… カー…？」

私の意識は途切れた

『起きろ。』

シグナム

「誰だ…？」

『ようこそ。 シグナム。 「意識の次元」へ』

シグナム

「「意識の次元」？ そんなことより、貴様は誰だ！？ 何故、私の名前を知っている！！？」

『まあ、急かすな。 俺の名前は「リンネ」。 「空間」の「ノアメモリー」を持つ者だ。』

シグナム

「「リンネ」…！？ 「15番目」の「ノア」か！ 何故貴様が私の中に居るんだ！！！」

『そりゃお前が「15番目（俺）」の「宿主」だからだ。』

シグナム

「私が… 「15番目」の「宿主」…？」

『なんだよ。 「千年公」から聞いてねえのか？ ま、お前は「千年公」の敵だから仕方ねえか。』

シグナム

「私が「ノア」…？ そんなばかな… 私は… プログラムだぞ！
！？」

『お前… いつまでも自分たち「守護騎士」が「プログラム生命体」だと思ってるじゃねえよ。』

シグナム

「なっ…！？」

『お前達「守護騎士」は「最後の夜天の主」八神はやてに出会ってから「プログラム生命体」としての力を失ってるんだよ。何故かは俺にもわからねえが…俺はお前がはやてのところに現れた時からずっとお前の中に住んでたぜ。』

シグナム

「そんな、ばかな…」

崩れ落ちるシグナム。

『おやすみシグナム。 安らかな眠りを…』

アレン

「シグナム!!」

シグナム

「離れる。」

アレン

「!!!?」

目覚めたシグナムの周りには黒いオーラが纏われていた。

十話 シグナムの「覚醒」(後書き)

なのは後半空気ですね。

十一話

???。「久しぶりだな「千年公」。ウォーカーは「初めまして」
。だな。俺が「15番目」の「ノア」…「リンネ」だ」

アレン。「「リンネ」…!?! シグナムはどうしたんだ!」

リンネは笑いながら話始めた。

リンネ。「嗚呼。彼女なら、俺の「中」で眠ってもらってるよ。
案外呆気なかったな。俺の話が終わったら直ぐに気を失っちゃま
ったんだぜ? ハハハ!! どうだ? 傑作だろ?」

アレン。「……………」。

リンネ。「何?」

アレン・「シグナムの「姿」と「声」でそんな言葉を使つなー!!」

リンネ・「あっそ。つまんねえ奴だな。まあ、いいか。」

言い終わった瞬間、リンネは僕の真正面に移動していた。

僕はそれに驚きを隠せなかった。

アレン・「なっ!!!??」

リンネ・「お前も…」「空間」に消える。」

僕に片手を見せると、

リンネ・「はあっ!!」

ビシッ!!

「空間」に亀裂が入った。

そして、その「空間の亀裂」が弾け翔んだ。

そして、そこに在ったものは「ブラックホール」にも似た「黒い空間」だった。

そこに吸い込まれる。

アレン・「うあっ…！？　なんて…　力だ…！！　引き離せない…！！」

なのは・「アレンくん…！！」

リンネ・「そうか。　貴様も居たな。」

リンネはいつの間にかなのはの真横に居た。

不意に僕は叫んだ。

アレン・「やめろおおおおお…！！」

しかし、その叫びも虚しくなのは「空間」に吸い込まれてしまう。

アレン・「そんな…?!」

リンネ「安心しろ。」

と、リンネ。

僕はリンネの方に顔を向けた。

リンネ・「空間に飲まれれば、貴様も彼奴に会えるからな。」

アレン・「そんなの、信じられるか!!」

僕はそれを否定した。

リンネ・「まあ、信じる信じないはお前の勝手だ。俺にはまったくもって関係無いからな。」

リンネが言い終わると吸い込む力が強くなった。

アレン・「うわああっ!!!?!」

リンネ・「俺の継承した「空間」の「ノアメモリー」だがな？ 大半は「空間」自体を操る訳じゃない。「空間」に關与している「物質」、「物体」を操るんだ。だから、その「ブラックホール」は俺の技っていう訳だ。」

アレン・「なっ!!?!」

嫌な予感がして、「ブラックホール」を見た。

すると

なんと云つことだろうか。

「ブラックホール」が三つ重なっていたのだ。

アレン・「嘘、だ……」

リンネ・「さようなら。」「アレン・ウォーカー」

僕は吸い込まれてしまった。

アレン・「うわあああっ！！！！」

僕の意識はそこで途切れた。

アレン・「……………じゅう……………」

暗い「空間」の中、僕は意識を取り戻した。

アレン・「此处は……………「ブラックホール」の中か。悔しいな……………全然歯がたたなかった……………（シグナム……………戻ってきてほしいな……………）」

僕は心の中で思っていた。

シグナムに戻ってきてほしいと。

その時、なのはの声が聞こえてきた。

なのは・「アレンくん!!」

アレン・「なのは…? なのは!?!」

僕は内心驚いていた。

リンネの言っていた事は本当だったからだ。

僕達は直ぐに話し合いを始めた。

アレン・「脱出出来ない?」

なのは・「そうなの。 デイバインバスターを使ってもデイバインバスター「バースト」を使っても、エクセリオンバスターを使ってもそして、私の最強の魔法スターライトブレイカーを使っても傷一つこの「空間」にはつけられないの。」

アレン・「デイバインバスターや、エクセリオンバスターなら未だしもスターライトブレイカーでも無傷だなんて……」

なのは・「うん…… とってもショックなの……」

落ち込むのは。

スターライトブレイカーを喰らって無傷なのだから、仕方がない。

アレン・「……出来れば使いたくなかった。」

そう言っ僕は「黒い核鉄」を取り出した。

此処は「ブラックホール」の中だ。

もしかしたら、外まで届かずになのはだけだから大量に「エネルギー生命力吸収」をしてしまうかもしれない。

だから

アレン・「なのは。」

なのは・「アレンくん…?」

なのはは驚いた表情で僕を見ていた。

まあ、仕方ないだろう。

今まで「白髪」だった少年の髪の色が淡く光る「螢火」になり、肌の色が熱を帯びた「赤銅」に変わったのだから。

アレン・「淡く光る「螢火の髪」、熱を帯びた「赤銅の肌」…この症状は「ヴィクター化」と呼ばれていて、「人間」をやめた「証拠」です。」

なのは・「人間を… やめた…? 何を言っているの…? アレンくん…?」

アレン・「? 黒い核鉄?を「使う事」||人間を「やめる事」」。

僕はもう… 貴女達を傷付ける事しか出来ない。だから僕にとってもなのは達にとっても。」

なのは・「人間をやめた」って何…？ アレンくんは私達の前から… 「また」いなくなっちゃうの…!!？」

アレン・「さようなら、なのは。目が覚めたらこの事を、皆に話してください。」「武装錬金」「サンライトハート+」。

？黒い核鉄？のサンライトハートを展開した。

アレン・「サンライトクラッシャー!!！」

僕は展開したサンライトハートのサンライトスラッシャーで「ブラックホール」を貫き、なのはと共に脱出した。

千年伯爵・「本当にお久しぶりですねえ。リンネ」

リンネ・「ふん。」「14番目」は異空間に閉じ込めただけだ。
「14番目」なら、簡単に脱け出せるだろうが、「高町なのは」彼
奴はしばらくかかるだろうな。」

話をしていると突然、空に亀裂が入った。

リンネ・「どうやら、来たみたいだぜ。あんたはどうすんだ？
「千年公」。俺はしばらく旅に出るから帰らないぜ?。」

千年伯爵・「わかりました。では、先に帰らせてもらいますよ。」

リンネ・「嗚呼。」

「千年公」は？方舟？で消えた。

リンネ・「さて...」

亀裂が「パリン！」と割れて中からウォーカーと高町が現れた。

アレン・「リンネ!！」

リンネ・「待ってたぞ。　ウォーカー！」

アレン・「約束がある。」

「約束」 Ⅱ 戦闘のルール。

リンネ・「いいだろう。」

アレン・「なのはや六課の人間、一般人には手を出さないでほしい。それだけだ。」

リンネ・「いいだろう。　そのルール…　請け負った。」

俺はウォーカーの出したルールを了承した。

アレン・「？十字架ノ墓？！！」

リンネ・「「隕石^{メテオ}」！！」

僕は？十字架ノ墓？でリンネは「隕石」を使用した爆発で戦闘が開始された。

? 白い道化? ・【まったく… 全然ティーズの数が減らない…】

? 六幻? ・【まったく… 体力が全部持っていられちまうぜ…】

? 断罪者? ・【この程度で音をあげるな!! 装填!! ? 原罪の矢?!!!】

ティキ・「だから効かないっての。」

ティキはティーズを使って簡易的な盾を造り出して? 原罪の矢? を防いでしまっ。

? 断罪者? ・【ちいつ…!!】

毒づく。

ティキ・「お前らこんなところでいつまでも戦っていいのかよ？」

全員・『『『………?』』』

ティキの言葉にその場に居た全員がティキを向いた。

ティキ・「あのシグナムと奴。」「覚醒」したらしぜ？ 今、少年が戦ってるらしいからな。」「

全員・『『『なっ!!?!?』』』

全員目を見開いていた。

「覚醒」したシグナムとアレンが戦っているからだ。

ティキ・「俺は帰るがお前達はどつする？ まあ、お前達の事だから俺には関係無いがな。」「

そう言い残し、ティキは去っていった。

？白い道化？・【皆！ 急ぎましょう！（嫌な予感がする… アレン…）】

全員・『『『おうー！』『『『

僕達はアレンとシグナムの元に急いだ。

リンネ・「サンフレア太陽熱」！！」

アレン・「？消える？！！」

リンネは「太陽熱」を使ってアレンを攻撃するが、アレンの？消える？の掛け声で完全に消えた。

アレン・「無駄だ!!」

リンネ・「厄介だな。そのレアスキル。「創造の力」と言っただころか。(少しずつだが…)力が奪われていく…。彼奴の「螢火の髪」と「赤銅の肌」のせいか…? くそっ…」

アレン・「エネルギー! マキシмум 最大出力!! うおおお!!!」

リンネ・「ブラック シールド 黒孔の盾」!!」

アレンの突撃をリンネはブラックホールに似た黒い盾で防ぐが、盾に少し亀裂が入った。

リンネ・「何っ!?(威力が、さっきよりも強い! まさか… 彼は俺の力を吸収しているのか!?)」

アレン・「? 断罪者?!! 「装填」!! ? 紅蓮の矢? 「染」!!」

リンネ・「なめるなああああ!!! 「ブラックホール」「五層」!!!」

？紅蓮の矢？「染」を放つが、「ブラックホール」「五層」に全てのみこまれてしまった。

リンネ・「^{リベレイション}放出」！！」

そして、そのまま？紅蓮の矢？「染」を全て「放出」してきた。

アレン・「しまっ…！！」

アレンの近くで爆発が起きた。

リンネ・「甘かったな。ウォーカー。」

アレン・「っあああ！！！！」

僕の右肩から下が無くたっていた。

アレン・「うあああっ！！！！」

僕は叫んだ。

十二話（前書き）

因みにリンネは女です。

俺と言っていますが、紛れもなく女です。

十二話

リンネ・「ずいぶんとてこずらせてくれたな。だが、もう終わりだ。」

アレン・「どうでしょうね?」

こんな状況下でウォーカーは「ニヤリ」と笑った。

リンネ・「ふんっ。負け惜しみを……………消えろ!!」「隕石」「斑」!!」

隕石の群がアレンを襲った。

アレン・「ヴィクターは……………体を再生出来る!!」

アレンに隕石が当たって爆発が起こった。

ズズウウー……

ン……

？白い道化？・【ツツツ！！？なんて……圧力……！！！】

アレス・「吹き飛ばされるよー……！！！」

アイン・「アレス！！！」

吹き飛ばされそうになるアレスをアインが掴む。

？六幻？・【ちいつ……！！彼処に居るのはわかってるのに……
……！！！近寄れねえ……！！！！】

？断罪者？．．．【彼奴等．．．．．どれだけハードな戦いをしてやがる．．．
．．．．．！】

リンネ．「はあっ．．．．．はあっ．．．．．どうだ．．．！
？」

さすがに疲れが出てきたな．．．．．

未だに吸収は続いている．．．．．！

アレン．「まだまだ僕は死にませんよ。」

そこには右肩が再生したウォーカーが居た。

リンネ．「ちいっ．．．！」「放出」！！

？紅蓮の矢？「染」がブラックホールから放出される。

アレン・「？道化ノ帯?!！」

？紅蓮の矢？「染」を？道化ノ帯？で貫く。

リンネ・「ちっ……まあい。それより、薄々は気づいてるんだろ？俺がこの「体」を使っている限り、こいつの「剣」、
「レヴァンティン」を使えることが。」

そう言ってリンネはレヴァンティンを展開した。

だが、レヴァンティンは色が変わっていた。

アレン・「黒」……?」

リンネ・「俺の「魔光色」が「黒」だからな。」

アレン・「シグナム……返してもらおう!！」

リンネ・「だったら、俺を倒してみろ！！ そうしたら、シグナムが戻ってくるかもな！！」

アレン、リンネ・「第二ラウンド開始だ！！」

そしてまたぶつかった。

全員・『アレン……………！！』

全員、自分たちの無力さにうちひしがれていた。

そんな時

アレス・「アレン……………！！！！」

全員・『アレス!?!?』

アレスは一人、アレン達の元に走って行ってしまった。

リンネ・「紫電一閃!!」

アレン・「火判」!!」

リンネは紫電一閃をアレンは火判を使うが、リンネは火判をまるで紙を斬るかのように簡単に切り裂いてしまった。

アレン・「(やっぱり、まだ勝てない……!! ヴィクター化してるのに、まだパワー負けしてる……!!)? 十字架ノ墓?!!!」

リンネ・「まだ、無駄な抵抗を続けるか！」

アレン・「無駄じゃない！ まだ、希望は在る！！！」

ブラックシールドに？十字架ノ墓？が当たるが、少しだけ、亀裂が入っただけで防がれてしまった。

リンネ・「希望なんて……………始めっからねえんだよ！！！」

リンネから、さらに一層強い「黒い光」が放たれる。

アレン・「ツツツ！！？」

リンネ・「もう、お前は消える。」「漆黒ノ墓穴^{ホール}」

リンネの背後にいままでより比喩物にならないくらいの大サイズのブラックホールが出来上がっていた。

リンネ・「今度は……………簡単には脱け出せない。永遠の闇に飲まれて消え去れ。」

アレン・「うおおお!!!!」

サンライトハートを地面に突き刺した。

アレン・「諦めない！ 諦めなければ、きっと軌跡は起こせる!!!!」

リンネ・「消えろ!!!!」

そんな時

*・「アレン————!!!!」

一人の女の子の声が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477u/>

魔法少女リリカルなのは 異世界に行ったエクソシスト

2011年10月3日01時53分発行